

黒森峰のヴィットマン

ハンバーグ大好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昔からエリカと付き合いがある整備員志望のオリ主がキャツキヤウフフするお話です（戦車と）

独自解釈だったり、ちよつと黒森峰びいきだったり、共学化されたりするのでその辺ご注意。レギュレーションも少しばかり個人解釈と微妙に変えてたりするのでその辺もお慈悲。

目次

黒森峰のミハエル君	1
聖グロのダーズリンさん	27
外出先の雛芥子さんと西住さん	40
ふんすこ事情なエリカさん	53
色々あったヴァイツトマン	61
馴れ初めと出会いのお二人さん	84
全国大会開始	93

黒森峰のミハエル君

大海原に出ている学園艦なだけあって、夕暮れ時に差し込む夕陽はとても輝いていた。陸からはこうもはっきりは見えないとすら見える輝きは、思わず立ち止まり眺めてしまうのも已む無しといった魅力を放つ。船の推進音と風、小さく聞こえる波の音のせいで、思わずたそがれてしまっていた。

「何してんのアンタ」

ふと聞こえた声に振り向けば、色素が抜けた様な僅かに銀色を滲ませる、白が強いカスタード色の髪を風に揺らし、碧玉の瞳を少し吊り上げた少女が立っていた。鞆を持ち、下校の最中なのだろうと見てとれる。

「今日はアンタの部屋に行つて整備の様子を聞くつて言つてたじゃない」

「すまん、ちよつとね」

申し訳なさそうに少年は頭をがしがしと数度手榴を入れ、足元に置いた鞆を持って帰路に付く。

ここ、黒森峰学園艦の、黒森峰学園に通う二人は、共通して『戦車道』という物に精通している。だが戦車道は一般的にして基本的に、女性が嗜む物であつて、男性が関わるのは男手が必要となる整備方面でしかない。動かすのは女性、それを整備しサポートするのが男性という風になつている。例に漏れず、少女、逸見エリカは黒森峰学園の戦車道部に所属しており、少年、見入（みいり）クルトは整備部に所属していた。

本日はエリカが乗るティーガーIIの整備状況の報告や打ち合わせがある為、約束をしていたのだが、その帰りの最中に見つかつてしまった。

「今日夕飯はどうする？」

「どうするつて、家に帰つて食べるに決まつてるでしょ」

「そつか。イベリコ豚の粗挽き肉買つておいたからハンバーグにしよ

うと思ったけど、ならいいか」

「待ちなさい」

「ん？」

確信犯だろ、と言わんばかりに睨み付けるエリカに対し、クルトは素知らぬ顔で振り向く。彼女の好物は何を隠そうハンバーグ。外食は必ずハンバーグが絡む物を選ぶほどであり、カロリーの関係上、週に一回、多くても三回までと決めなければいけない程に好んでいる食べ物である。そんな中で、わざわざイベリコ豚の粗挽き肉がある、とまで付け加えたのは確信犯と思われるのも仕方がない。

「他の材料はあるんでしょうね」

「そりや当然、無きや作れないし」

「お米は？」

「抜かりなく」

「今日はアンタの家でミーティングするから」

「はいはい」

大体月に数回ほどの食事会。二人並んで歩くさまは一見すれば恋人に見えなくもない。だがお互いが見せる表情や雰囲気はそういういつもの感じられず、手を繋ぐ事も無ければ会話もなく静かに歩くのみ。この関係も、既に長い事続いていた。今にして思えば、いつからの付き合いなのだろうとクルトは考える。細かい年数は覚えていないが、おおざっぱにどれくらいの付き合いなのかは把握している。

もう十年ほど前の事、あの頃は未だに戦車は男が乗っているというイメージも根付いており、戦車道文化も今よりは下火だった頃。同じクラスで戦車に乗っているエリカに対し、クルトの友達が、女が戦車に乗るのは変だ、という揶揄いから始まった。それに反発したエリカを庇い、好きで乗ってるならいいじゃん、という言葉投げかけたのがクルトで、それから色々あって、今に至る。腐れ縁とも言えるだろう。

その後、黒森峰小学校から中学校に進学する際、分校がある学園艦へ同時に乗り、家が近所という訳でもなく、中学生の頃から寮生活が始まり、それでも細かい付き合いは欠かさない辺り、お互いそれほど

避けている訳でも、些細な関係でもないというのは無自覚ながら理解していたのだろう。

「お邪魔します」

玄関の目の前にあるキッチンを抜けて、部屋に入る。壁際に置かれたベッドとデスク。デスク上にはパソコンモニター、足元には大きなパソコン本体が置かれており、いかにもパワーがあると物語っている。申し訳程度の小さい本棚には戦車に関する書籍が多く、国ごとの戦車とそれらの内部構造に関する物が多い。それ以外にはテレビ、エアコン、コタツと一体になったテーブル、キッチンの物とは別の小型サイズの冷蔵庫が置いてあり、家具の充実感はそこそこだ。

「いつも通り用意してあるから、ログインして先に見てて。こっちの準備してるから」

「ん」

鞆を置いた二人はそれぞれ別の方向へ。クルトはキッチンに、エリカはデスクにあるパソコンモニターへ向かう。置かれたマウスは毎日きちんと掃除しているのかピカピカで、傍らには消毒用アルコールと清掃用の脱脂綿が入った箱が置いてある。誰の為に用意しているのか理解して、エリカは小さく笑いが込み上げる。

モニターに表示されたアカウントは二つ、クルト個人用の物と共通アカウント。共通アカウントの方へとログインすれば、散らばらない程度にフォルダが整理されていた。向かう先は整備録と名付けられたフォルダ。そこにはPDFファイル、3Dモデルが置かれており、それら二つを動かす。その為の大型のPCだった。

「やっぱり、主砲のライフリングが変だったのね」

今回整備された場所は主に主砲。静止射撃の際、どうにも着弾位置をおかしく感じた砲手とエリカが点検を頼んだのだが、PDFの整備箇所を見る限り、部分的に摩耗してしまった場所があったらしい。既に新しい主砲は発注しており、明日にでも取り付け作業は完了と書いてある。

その他にもエンジン周りを整備する予定が取り付けられており、この辺は素直にありがたいとも言える。戦車道に於いて、戦車の整備と

というのは自分達が行う、というのはそれなりに当たり前とも言える事だった。でなければいざ試合中に履帯が外れた時等、応急修理が必要な際にどうしようもなくなるからである。勿論、整備課に頼んで整備して貰う事もあるが、普通は戦車に詳しい人間など居る訳もなく、そういうった人間は少ないため、一つの学園艦から他の学園艦に派遣される事も多々ある事だった。

かくいうクルトもそういった人物であり、エンジン周りの整備を特に嫌う聖グロリアーナ学院には何度も向かっているとエリカは聞いていた。それもそうだろう、オイル塗れになり、ガソリンの臭いに包まれ、加えて頑丈なボルトを必死に外して中を整備しなければいけないのだ。聖グロリアーナ学院、通称聖グロであれば整備課も備えてもおかしくないのだが、優雅ではないという理由で用意しておらず、悪いのならば新品を、と考えるのもまたブルジョワらしいとエリカは考えた。

そう考えれば、身近に戦車の整備の相談が出来る相手がいるというのは彼女にとっても喜ばしい事だった。彼に相談した事で、エリカが敬愛する黒森峰戦車道部の隊長でもある西住まほの乗るティーガーも、エンジンや履帯周り、サスペンションの不具合が無くなり機動性の問題が改善したと多いに喜ばれた。

学園の整備部も人数はかなり少ない。クルトを含めて四人、それも、純粹に黒森峰学園の生徒であればクルト一人のみというブラックもブラックな状況。他三名は生徒ではなくそれ専用で雇われた整備員なのだからビックリもビックリだ。とは言え、その分の特別手当も支給されているので、こうして家具も充実しているのだろう。

「エリカー、できたよー」

そこから、黒森峰で使用している他車両の点検案などを覗いて居れば、部屋に入って来たクルトがトレイに皿を乗せて現れた。熱々の鉄板の上にはアルミホイルが丸く包まれており、サイドにはバターで軽くソテーしたニンジンとほうれん草、バターコーンが置いてある。ソースは無いので、恐らくは包み焼きされた中は幸せな事になっているだろうとエリカは内心で喜んだ。グリーンサラダに野菜たっぷり

のポトフ、そしてご飯と完璧な組み合わせ。

「あんだ、ほんと料理得意よね」

「一人暮らししていると飽きるせいでレパートリーが増えちゃうんだよ。おかげでキッチンも狭くなってきたよ」

言われてみれば、ぶら下がっているフライパンの数は増えている上に、鉄パンとアルミパンは基本、中華鍋から、いっどこで使うんだと言わんばかりのステンレス、チタン、銅パン、スキレット等々。調味料も所せましと並んでおり、本業はなんだと疑問を抱きたくなる。とは言えその分、腕前には信頼が持てるし、こうして夕飯を食べに行けば凝った物を出してくれるのも本心では嬉しい事だ。

「それじゃ、いただきます」

「いただきます」

わくわく感をなるべく顔に出さない様にしながら、包まれたアルミホイルをナイフとフォークを使ってほどけば、じゅわじゅわと泡立つデミグラスソースとごろりと大きな丸いハンバーグ。フォークを突き刺せば、普段食べている物よりも感じる堅さ。恐らくは繋ぎをほぼ使わずに作ったのだらうと即座に察する。たっぷりとデミグラスソースに絡めて、息を吹きかけて口に入れば、幸せがいっぱいに広がる。

デミグラスソースの濃厚な味わいがじわじわと溢れる肉汁と絡み、塩コショウとナツメグの香り、香辛料がしっかりと死なずに肉の臭みを消して旨味に変化させている。それを見て満足そうに頷いたクルトもハンバーグへとナイフとフォークを伸ばした。

「うん、今回はバターコーンも美味しく出来てる」

「前はちよつと甘味が強すぎたものね」

「想定してたよりも缶詰のコーンが甘かったからね。少し控えめにしたら具合も良い感じ」

程よく脂っこい所を塩と粉チーズのみのグリーンサラダが程よくさっぱりとして申し分ない。塩気も口に残る肉の味に溶け込む事で物足りなさも無く、ポトフも野菜がしっかりとスープを吸い込んで文

句のつけ所も無かった。

「アイアシエツケはないの？」

「いや、当然の様に言うけど普通は無いからね」

その言葉にエリカは口を尖らせた。アイアシエツケとは言つてしまえばドイツ式のバイクドチーズケーキの事で、ハンバーグを作る意図があつて呼ぶくらいなら最初から用意しろ、という事なのだろう。皿を下げてキッチンへ向かつたクルトから視線を離し、テレビへと変更する。時間帯的にも映つているのはニュースだが、静かな時間に流れるニュースを、コーヒーでも飲みながらぼんやりと眺めるのがエリカは好きだった。

ややあつて、僅かにコーヒーの香りが漂つた事に気付いてテレビから視線を変えれば、再び皿を持ってクルトが戻つて来る。

「何よ、準備してたならそう言いなさいよ」

「まあ一応は試して作つてみたから味の保証はしないけど」

と言いながら、人前に出す時点で食べられる品なのは長年の知り合いでもあるエリカからすれば理解している。真四角に切られたそれはクッキー生地、カスタード、チーズクリーム、クアルクの四層から成つており、しっかりと粉砂糖を振り掛けている時点でそれなりに力を入れているのは一目瞭然。

口に含めばそれぞれ違つた甘さが広がる。カスタードクリームのもろやかな甘味、ややレモンの酸味を感じるクアルク、牛乳の味を強く感じられるチーズクリーム、僅かにサクサクとした食感のクッキー生地と、口の中が実に楽しい。ブラックコーヒーも甘さをより強め、一般家庭で出す食後のデザートとしてとして申し分ない出来である。

「それじゃ、明日また」

「あいよ」

コーヒーを飲み終わり、無言のままニュースを眺めたエリカは一息つき、鞆を持って自宅寮へと向かう。いつも通りの流れ。それを確認した後、軽く背伸びをした後にクルトはパソコンへと向かい、自分が考えているティーガーIIの整備録を調整しながら、明日へ向けての確

認をした後、眠りにつく。何せハードワークな毎日だ、些細な息抜きが終われば即座に休まなければ体が持たないのだ。

風呂に入り、髪を乾かして眠って翌日。目覚ましは鳴ったのは早朝四時、薄らと空が明るくなった頃に彼の一日は始まる。本日はザワークラウト、刻んだ玉ねぎを入れ、熱々に茹で上がったソーセージをコツペパンに挟む。ケチャップ、マスタード、ピーナツバターを入れたホットドッグで手軽に済ませて学園に向かう。

「おはようございまーす」

更衣室で真っ黒なツナギに着替えた彼が車庫に向かえば、そこには既に三人の整備員が待機している。彼と同じく黒いツナギを身にまとっており、その雰囲気は歴戦の戦車乗りにも劣っていない。

「お、ミハエル来たな」

「おつす、リツベントロップさん、カリウスさん、ヴェンドルフさん」

整備部の四名はそれぞれ、第二次世界大戦中に有名となったドイツの戦車兵の渾名を付けて呼んでいる。由来はクルトの苗字の見入がミハイルから連想し、ミハエルにも読めるではという所から、戦車に関わっているのでミハエル・ヴィットマンからなぞって今に至る。連帯感も生まれ、歳の差はあるがお互いに遠慮しない事で、妥協を許さない事がより整備の具合を向上させて良い方向に進んでいる。

「今日はティーガーIIかあ、重てえんだよなあこいつ」

「軽い戦車なんてないですよ、カルロベローチエぐらいですかね」

リツベントロップの言葉にカリウスが笑いながら合わせた。そりやそうだと周りから小さく笑いが起きた事でまずは体の緊張も解れた。

「違いねえや。やるかー！モノはもう届いてんのか？」

「あつここにありますよ。ほら」

ヴェンドルフが指さした先にあるのは、普段ティーガーIIに装着されている主砲とは少し形状が違った。88mm主砲ではなく、105mmのパーパープランで設計された主砲だ。本来であれば出回っていない品ではあるが、戦車道がにぎわっている事で本国ドイツでも様々な部品の生産が進んでおり、その中でも、黒森峰に最優先で出

回ったのがこの主砲である。戦車改造キットは多く出回っており、第二次世界大戦中に完成している戦車でなければならぬという決まりがあった。主砲に関しても計画はあったが、実際に完成していたかどうかをドイツに問い合わせた所、『試験モデルの完成品はあった』という事で今に至る。そうでなければ本来の88mmだったが、いつそ変えるのであればという事でこれに至る。

本来ティーガーIIはその後期としてE計画と呼ばれる戦車の雛型にもなっており、部品は出来ているが大元の完成品は出来ていないというパターンばかりだ。唯一、E100という物だけが完成しているものの、戦後はアメリカに引き渡され、結局組み立ても虚しくスクラップになった歴史がある。戦車道連盟の言い分としては、戦時中に完成していたのならまあ良いか、というなんとも曖昧な返事だが、部品が適応しているのであればオーケーという事なのだろう。

実際、サンダースや聖グロのクルセイダーも内部パーツを改造した物を使用しているので、そうであれば主砲を改良しても特に問題はないという事になる。

「それじゃあ砲塔の取りはずしいくぞー」

戦車の主砲には様々な種類があるが、大体共通しているのは砲塔と主砲が一体になっているという点だろう。故に、主砲が曲がれば砲塔も変えなければいけないと言うデメリットも存在するので、足回り以上にデリケートな扱いが必要となる。接続されたボルトを三人掛かりで大型レンチで回し、オイルで滑りを良くして五分かけて漸く一つ。それらを繰り返していけば砲塔を変える準備は万端だ。

クレーンで吊り上げられた砲塔をゆっくりと降ろし、交代で新たな主砲を取り付ける。新品同然の主砲は車体のデザートカラーと違ってジャーマングレーのまま。車内にて男三人が待機し、砲塔がしっかりと固定部位にはまり込んでいるかを確認して、再びボルトを回す。主砲を撃った反動で外れたともなれば、死人が出る程の重大事故に繋がりがねない。特に、戦車を指揮する戦車長は砲塔から顔を出したりするので、間違いなく死んでしまうだろう。

そうなった際、この戦車を任されているのはエリカだ。そんな事は

絶対にあつてはいけない、慎重に慎重な行動を重ね、留め具を外れない様にしっかりと固定、溶接し、五重チエックで問題が無いかを確認する事で作業は終了。しかし本題は此処からだ。

実際に動かして、問題が無いかどうかをテストしなければならぬ。時刻は既に六時、移動時間もあるが、整備というのとはとにかく緊張する上に慎重に行わなければならない場所だ。エンジン周りは車体内部分がカーボンで補強されているので火事やエンジンの爆発による人身事故に繋がりにくいのが、砲塔の様な部位は先も言った通り、大事故に繋がりがかねない。一つの作業に時間をかけるのも当然であった。

「それじゃあ動かすぞ。えっと、確かイグニションはつと」

エンジンに火を入れるレバーを押し込めば、腹の底から響く様な重低音と共に僅かな振動が発生する。ゆっくりと加速して車庫を出て、向かった先は砲撃場だ。まずは砲塔を何度も旋回させ、その最中に外れないかどうかの確認だが、この時点では問題無し。次は行進間射撃を二十、停止射撃を二十繰り返し、最後に点検をして終了。

「よいしょつと、やっぱ重いなあ〜砲弾つて」

「でも、これを女子高生が持ち上げて装填するんだろ？　すげえな今の若い子つて」

「確かに。ティーガーIIなんて足回りが悪いからよく履帯も外れるし、試合中に直すとかとんでもねえよなあ」

装填手をカリウス、運転手をヴェンドルフ、砲手をリツベントロツプ、車長をクルトことミハエルが担当。車内で三人の発言に耳を傾けつつ、高まる心臓の音が実に煩わしい。とは言え緊張するのも仕方がない、下手をすれば致命傷を負うのはクルトなのだから。

「砲塔の具合はどうだー？　ミハエル」

「こっちは大丈夫ですよカリウスさん、内側からは特に問題ないんで、外に出てボルトの具合見てみます」

キューポラから身を乗り出し、顔を下に向けて具合を見る。360°回転を何度も繰り返し返しているが、現時点では何ともない。回った際のひずみによって発生する音も無く、問題無しと言えるだろう。

「取り敢えずはオツケーっぽいんで、今度は射撃行ってみましょう」

「あいよー!」

主砲が上下に何度も動き、具合を確かめるが動きによどみは無い。

「Feuer!」

クルトの指示に従って引き金を引けば、強い衝撃と共に砲弾が放たれる。88mmとは違う大口径は地面に大穴を開け、以前テストした時よりも大きな衝撃に戦車内の男達は大興奮だ。

「ビュー!! さっすが105mm、音がダンチだ」

「砲弾の重さも段違いだけどな!!!」

「はっは、がんばれーカリウス」

「運転手は気軽そうでいいねえ!! 手伝ってくれてもいいんだけど?!」

実際、装填手は特に大変だろう。砲弾の重さも変わる為、苦労も倍だ。装填手が二人欲しくなるのも仕方がない。小学生の子供一人を持ち上げているのとはぼ変わりが無いのだから。その後も射撃テストを繰り返したが、特に問題はない。しっかりと接続は完了し、動作不良も一切見られなかった。

「ミハエル、俺らは最後に点検するから戻っていいぞ、授業あるだろう?」

「すみません、お先します」

既に遠目には人が動いているのも見えるし、校舎の窓には生徒が行きかっているのが確認出来る。素早く更衣室に向かった後は消臭スプレーをツナギに入念に振り掛け、手早くシャワーで汗を流し、制服に着替えて教室へと向かう。クルトのクラスは一年三組、共学となつて二年しか経っていないせいかな男子生徒もまだ少なく、三組はクルト一人だけと中々に肩身が狭い。エリカもクラスが別であり、この三組では彼の顔馴染みは二人のみ。

「お、ミハエルおっすおっす」

「ミハエル君おいす」

「雛芥子さん、直下さん、おはよう」

雛芥子はパンターG型、直下はヤークトパンターの車長を務める戦車道を履修している生徒で、エリカからの繋がりでも知り合った。特に直下のヤークトパンターは整備面で良く足回りの調整を行っており、そこから交友が深まった。雛芥子はパンターのエンジン出力の整備に関わってからだ。どちらも戦車道に関わっている為、彼とはある意味で密接な関係にあると言ってもいいだろう。クラスで孤独にならない原因でもあり、クルトからすればありがたい存在だ。

「あれ、石罅の匂いがするけど、整備？」

「うん、エリカのティーガーIIの主砲を変えて来た。もう一苦労で汗だく」

「うはあ、朝だから涼しいけど、昼過ぎとかだとちよつとキツそうだね」

「私も想像したくないわ」

直下の言葉に雛芥子が同調して頷く。ツナギは身を守る衣服の為に密封性が高い、その分やはり体感温度は上がる事を考慮すれば辛いというのは二人でもすぐわかるのだろう。それに、一応は車長、自分で戦車の調整を行う為にツナギを着用する事もあるので、その辛さは体感済みである。

「つてか、主砲変えたって、全部新調？」

「レギュレーションすれすれだけど砲塔ごと全部変えて105mm」

にやりと、悪戯に笑うクルトに直下は驚愕の表情を浮かべる。主砲の威力が変わるだけでも戦果が大きく変わるからだ。ただでさえ強靱で硬く、前線圧力があるティーガーIIの攻撃力が上がるとなれば相当な脅威だ。

「マジ？ それってオツケーなの？」

直下の疑問は尤もだが、しかし搭載している時点で答えは出ていた。

「ドイツ本国データだと搭載型車両は試験状態でも一両あったし、エンジンとかその辺もまだ改良出来そうな感じだったよ」

「ティーガーIIってE計画の雛型だもんねー、そう考えるとパワーアップの余地は結構ありそう」

「パンター全車も割と見直しするだろうから、その時は宜しくね雛芥子さん」

「ういうい、お礼にアイスくらいなら奢るよ」

「あ！ウチのヤクパンもね!!」

「りよーかいりよーかい。でもヤクパンって上半分全部取り外しでかなり時間掛かるから、結構後回しになるかもね」

「うげー、なるはやでよろ」

「その辺はパーツの都合によるかなあ」

だよね、と相槌を打って、始業のチャイムを確認して二人は直下と雛芥子は慌てて席へと戻る。黒森峰学園は名門校であり、校風が硬派な事もあってか中々にお堅い生徒が集まる特徴がある。良く言えば真面目で物事に必死に取り組むが、一方で頑固であったり融通が利かないといった点もまた目立つ。特に戦車道で名高い分、西住流という戦車道の流派の影響もあってかより一層その傾向が強くなった。

居眠りをする生徒などはおらず、しっかりと授業に取り組む。もちろんクルトもだ。小さな事からこつこつと、そうでなければエリカが煩いのである。そうして授業を続けて昼食、漸く終わったと背伸びをして教室の出口に目を向ければ、直下と雛芥子が手招きしている。食堂に行こうと言う合図だ。

「あく、ダメだ。数学だけはマジで苦手だわ」

「直下さんいっつもそれ言ってるよね」

「苦手な物は苦手なんだもん」

「射撃にも一応は計算関わるじゃん、そこはどうなの？」

「そこはまた別って感じ」

「選り好みしていると赤点取るよ？」

「そうになったらクルト様に神頼みするから」

「拒否で」

「え」

にべもなく断られた直下が絶望的な表情を浮かべながら向かった食堂。大勢の生徒で賑わっており、やはり女子生徒が圧倒的多数だ。

漸く慣れては来たが、やはり時折向けられる好奇の視線だけはクルトは慣れる事は出来ない。物珍しいと言うのもあるのだろうが、だからと言ってじろじろと見られるのは気持ちの悪い事ではない。恐らく、女子二人と連れ添っているので関係を勘ぐられているのだろう。恋に多感な女子高生なので仕方ないが、それでも受け入れるというのも難しい。

「おつすエリカ」

「ああ、アンタね」

「何か反応冷たくない？」

「そう？ いつも通りだと思っけど」

食堂を見渡せば、既に四人分確保していたエリカと合流し、直下と雛芥子をテーブル待ちに置いて食券販売機へと向かう。どの生徒も、選ぶメニューは様々だが、大抵選んでいるのはノンアルコールビール。ドイツをモチーフとしている黒森峰ではノンアルコールビールの製造が盛んであり、生徒たちにも愛飲されているのだ。ノンアルコールなので未成年が飲んでも問題は無いが、もしこれが一般企業メーカーであればなるべく控えた方がいいと言う回答を出すだろう。何故なら、味は本物に限りなく近づけているので、飲酒への興味を示してしまうからである。

とは言えそれは一応の注意喚起だけで飲む分には一切問題無く、そして黒森峰学園艦ではそれを気にする生徒などいなかった。

「今日はカーリールとザワークラウトのセットにしよう。直下さんはアイスバインのサラダセットで雛芥子さんはカルトツフェルプツファアとヴァイスヴルストで二人ともスタウトだったよね。エリカはどうする？」

「ジャーマンポテトのセットとピルスナーにしようかしら」

「ん、迷ったけど、俺もいつも通りスタウトにしよう」

「ほんとに好きよねアンタ達」

「あの苦味が良いんだよ苦味が、コクもあるし泡も別物みたいで美味しく感じるんだよ」

「アタシはちよつと微妙ね」

「ま、好みはそれぞれだからしゃーない」

食券を受付に渡し、受取口へと並ぶ。横にずらりと生徒が並び、一人、また一人と前に進む。料理が乗せられた大型のトレイとドリンクが乗ったトレイをクルトが受け取った。

「いつも思うけど、着いて来る意味ないわよね」

「まあ、男子の気遣いって奴ですよ」

何故かその言葉に頷いたのは周囲の女子生徒だが、エリカは困惑気味の表情を浮かべながらもクルトを立てる事にする。ぶつからない様に人の合間を縫ってテーブルへと到着すれば、直下と雛芥子は会話を賑わっていた様だ。

「ほらやっぱリミハエルもスタウトじゃん、ウチの勝ち〜」

「くっそー、今日はエリカに合わせてピルスナーにすると思ってたんだけどなー」

「俺で賭けしないでよ」

それぞれのテーブルに皿を渡し、着席して食事になりつく。カリールヴルストは焼いたソーセージにカレー粉とケチャップを塗しただけの、料理というよりはソーセージに調味料を乗せただけだが、しかし何とも言えない魔性の魅力があるのだ。スパイスを感じる味わいにケチャップの酸味、菌ごたえがよくパリッと弾ける皮と肉厚なソレがただただ相性が良い。ザワークラウトで口直しをしながら、スタウトを含めばまた味わいも変化する。付け合わせのポテトのお陰で、ノンアルコールでなければただのツマミでしかない。

「この後は食休みしたら練習だね。大会前だし気合入れないと」

エリカたち戦車道履修の三人は、今期の全国大会のレギュラー選抜に向けて気合を入れている様子だ。一方のクルトはティーガーIIがしっかりと稼働するか、エリカ達の目から見てもおかしい点は無いか気がなまって仕方がない。整備は出来ても動かす事は素人だ、そこは専門がしっかりと判断しなければ調整が間に合わなくなる。

「ティーガーIIはもう整備は終わってるのよね？」

「朝の内に取り換え作業は終わってるよ。ある程度動かしたけど問題無いけど、その辺はエリカ達が乗ってからじゃないと完璧とは言えな

いから、軽く様子見て貰えると助かる」

「105mmになったおかげで攻撃力は増したけどその分のDPMは落ちるのが難点ね。ま、もとより早い訳でもなかったし、連続して撃つ状況なんてそもそも有り得ないからいいんだけど」

「まあ、エリカならちゃんと思いこなすでしょ」

「当然じゃない」

「……………」

そのやり取りを見ていた雛芥子はふと、思った。既に見慣れた光景だし、入学からエリカと戦車道で知り合い、如何にもとっつきにくいエリカが男子と仲が良さそうに話している場面を見た時ほど驚いた事は無い。だが今になって、冷静に考えれば考える。この二人、一体どこまでの関係なのか、と。どうやら隣に座る直下も同じ考えをしているようで、訝しむ表情で二人を見ていた。スタウトで着いた泡を舐め取ったクルトがそれに気づき、首を傾げながら何事かと視線を向ける。それにエリカも続き、何をやってるんだと呆れが混じった表情をしていた。

「何か？」

「いや、今の今まですつかり抜けてた疑問なんだけどさあ。二人って、恋人？」

「それは無いなあ（それは無いわね）」

随分と、はつきりと重なったにも関わらず、二人は照れ隠しでも何でも無さそうに、ただ当然の如くと言わんばかりの真顔で言い切った。逆に抜けた表情をするのは言い返された二人だ。

「エリカとミハエルが知り合ったのっていつ頃？」

「小学校の低学年の時ね」

「切っ掛けは？」

「戦車に女が乗るのが変って言ってた俺の友達に、別に好きならよくね？ って言った事だったかな」

「そこからは？」

「同じクラスで、戦車に興味示したコイツと話してる内に知り合いになったわね」

「その後は？」

「エリカは戦車道、俺は乗ってみたかったけどほら、戦車道って女の人
が嗜むから。でも戦車好きだから、関わる方向で整備士目指して一緒
に勉強って感じ」

直下、雛芥子の交互の質問に淀みなく答える。切っ掛けもぼつち
り、その後の展開も王道的。なんでそれで逆にお互いを意識しないん
だこの馬鹿二人は、と内心で悪態を付きたくなったが、そこで理解し
た。この二人はもう夫婦的な感じで、好きだ嫌いだという垣根を飛び
越えて友情エンドなんだろう、と。加えて戦車馬鹿なものも加わってし
まったのも恋愛に進まなかった原因なんだろうと把握した。

「これがグレイズという奴ですか」

「もう十年近くのグレイズとか理解不能なんですけど」

「何馬鹿な事言ってるんだか」

グイ、と残りのピルスナーを飲み干したエリカは、空になった皿と
グラスをクルトのトレイへと重ねた。それを皮切りに他の二人の分
を纏め、返却口へと返しに行く。相も変わらず人が多く行きかう最
中、皿を返し終わったクルトはふと、視線が一点に集中した。黒森峰
学園戦車道の隊長である西住まほ、その妹である、西住みほの存在だ。

姉は如何にもお堅い、しつかりとした軍人という雰囲気に対し、妹
の方は何処か頼りなさげでふにやふにやとしている様にも見える。
だが指揮能力の高さは負けておらず、副隊長を任されているのは家族
びいきではなく実力であることを示していた。そんな彼女だが、どう
やら人が動きすぎてトレイの返却口まで進めない状況に陥っている
様子だった。それも仕方ない。様々な位置のテーブルから生徒が
行ったり来たりを繰り返すのだ、食券の販売機前や受取口と違い、並
ぶ事もなくランダムに人が動く。加えてどうやら昼食にラーメンを
選んだらしく、中のスープがぶつかると零れる事を躊躇し、結果的
に動けなくなってしまうていた。

「あ、すみません通ります」

意図的に人の流れに声を掛けて隙間を作り、その隙にみほへと手招
きをする。漸く意図に気付き、待っていた生徒もみほが持っているト

レイと中身を見て、ぶつかるのは不味いと考えたのか、先に行かせる事を選んだ。彼女を先導するように動けば、目立つ男子生徒にぶつからない様にと動きが慎重になるお陰で進みやすくなった。

「あの、ありがとうございます。整備部の、見入さんですよね？」

トレイを返却し終えたみほの言葉に思わず驚く。接する機会は殆ど無く、彼女の乗るティーガーもまほの物と一緒に整備したが、対応したのはまほなので実際に顔をまともに合わせる機会はこれが初めてと言える。だというのに自分の名前を把握されていた事が意外だった。

「あれ、自分の事知ってるんですか？ 副隊長殿」

「私達の重たい戦車を頑張って整備してくれる人ですから、勿論です。カリウスさん、ヴェンドルフさん、リツベントロップさんも勿論御存知です」

「ありや、そうだったんだ。それじゃあ改めまして、一年三組見入クルト、整備部所属です、よろしくお願いしますね副隊長殿」

「西住みほです、副隊長殿って呼ばなくても、大丈夫ですよ？」

「そこはほら、何となく雰囲気なので」

なんだそれ、と小さく笑い掛けてから別れ、テーブルに戻る。

「遅かったわね」

「返却口が混んでたからね」

それもそうかと納得し、椅子から立つ。いい具合に休憩も終わったので戦車道の訓練に向かう様子だ。本日は授業が午前中のみのため、此処からはフリータイムという訳だ。しかしエリカ達は当然練習があり、クルトもティーガーの確認をしなければいけないので必然的に付き添う形となる。更衣室で分かれた一同は、エリカ達はタンクジャケットに着替え、クルトはロッカーに置いてある工具箱を持ち出して車庫へと向かった。既に多くの生徒が集まっており、号令を終えて戦車に乗りこんでいる最中だった。

クルトが向かったティーガーIIでは既にイグニッションを入れており、どうやら彼が来るのを待っていたようだった。キューポラから顔を出しているエリカが早く来いと手招きしている。

「ごめんごめん、おまたせ」

「揃ったわね、どうする。中に入る？」

「いや、砲塔の上でいいよ」

今回は集団訓練ではなく射撃訓練を行う様子だ。ばらばらだが、各自が射撃場へと向かっていくのが見える。ティーガーIIも重苦しいエンジン音を響かせながらゆっくりと全身、少しでも揺れた車体に、慌てて砲塔へと手を添えてバランスを整えながら、周囲を進む戦車を見る。その中に、ヤークトパンターとパンターG型を確認して視線を向ければ、キューポラから顔を出す二人が此方へと手を振っていた。「うぐぐ、やっぱりちよつと重くなってるなあ」

射撃場に到着し、新たに変えた砲弾を持ち上げる装填手の呻き声に、やっぱりかと苦笑する。ただでさえ大きかったティーガーIIの砲弾が更に大きくなるのだから当然だ。

「そこに居ると撃てないから中入りなさいよ」

「はいはい。お邪魔します」

キューポラから中に入り込めば、ティーガーIIの車体の大きさの阴影で一人分ならずん入り入る。

「あ、どうも」

少し様子を見る様にお辞儀をする一同に頭を下げ返しながら、見るのは車内の反応。砲手がトリガーを引けば、真つ直ぐに放たれた砲弾はしっかりと狙った場所に命中している。

「具合はどうですか？」

「重さがありますけど、精度は前よりも良くなっている気がします。着弾までの時間も短くなっているので弾速も伸びてますね。今の所は特に問題は無いです」

通信手の生徒がメモ帳を取り出し、片手にはストップウォッチを握って何かを計測していた。恐らくは以前の着弾までの時間との差なのだろう。随分と細かいなとは思うが、勝手の違いを言い出す訳にもいかず、成程と頷くだけである。

「現状の問題は装填時間が少し伸びたくらいね。腕の負担はどう？」
「重くなったのは間違いないんですけど、とは言え以前とはそれほど

大きく変わったと言う感じもしません。腕の負担もこれといって問題は無さそうですね、前と変わらずちゃんとケアすれば大丈夫そうです」

「一応は色々試してみましよう。整備の腕は疑ってないから、後は私達がしっかりとこれを活かすことが重要よ」

「はい！」

普段はあまり見ないエリカの姿に、感心を覚えると同時に強い纏まりを感じた。黒森峰の強みはこういった団結力もあるのだろう。目に見えて、はつきりと優秀と言える上官から下がそれに素直に従える実力を持つ事で、緩みない一体感による制圧力が黒森峰の強みとも言えるだろう。それぞれ時代に名を遺す名戦車であるからこそ、それによつて発揮される力もまた強くなる。そんな時だった。

「あの〜」

「……ん？ 俺？」

「はい、パンターの四番車から通信が、見入さんにだそうで」

自分に指を向け、頷いたのを確認した後に通信機に繋がったマイクとヘッドセットが渡された。お借りします、と一言添えて受け取り、ヘッドセットを装着して声を出す。

「あーあー、こちら実入クルト。自分に用があると聞きましたが、どうぞー」

『実はこっちのパンターのエンジンの動きが何か変なんです。見て貰っても大丈夫ですか？』

「りよーかい、申し訳ないんですけど、車庫まで運んでおいてくれると助かりますー」

『はい』

「整備の通信？」

「うん、エンジントラブルだって。たぶん中がやられちゃってると思うから点検してくる」

マイクを返し、訪ねて来たエリカに短く内容を伝え、工具箱を持って戦車を降りる。車庫まではそこそこ離れていたが、途中、問題の車両が通りかかって乗せて貰い、そのまま到着すると、エンジン周りを

軽く冷やしておくように頼み、クルトはツナギへと着替える為に更衣室に一度戻る。そのついでに、より細かい工具が入ったもう一つの工具箱も持って向かえば、戦車の周りには不安そうにしている五名。

「お待たせしましたー。エンジントラブルの具合はどういう感じですか？ 入りが悪いのか、それとも出力が上がらない感じですか？」

「えっと、両方です。上がるには上がるんですけど、なんだか重たい感じがして」

「ちよつと足元失礼します。足回りを念のために確認するんで、離れた方がよいと思います」

この警告は危ないからという訳ではなく、制服が関係している。つまりはスカートを履いているので、履帯の周囲を見て回ったりするときに過ちが起きては大変な事になるからだ。せつかく築いた信頼も崩れてしまう為の警告である。

「……………ん、やっぱり外側も内側も問題ないから中身かあ。よいしょつと」

後部にある点検ハッチを開ければ、冷却されたとは言え軽い熱気が抜け出してくる。耐熱グローブをしつかりと嵌めてエンジンの具合を見るが、本体自体は特に問題は無さげだ。オイル漏れも無ければ、ライトで照らして確認してもボルトの緩み、焼き切れている部位などは無い。と成れば恐らく、排熱とガソリンの循環が上手くいっていないというのが問題だろう。

「ちよつと長丁場になりそうですね。パンターの部品は予備があるんで、ちよつとこの辺の天板まるまる外して中をきちんと言わないとダメそうです」

「そう、ですか。明日には直りますか?! 私達、レギュラーを目指す為にもつと頑張りたいです！」

「ん……………うん、大丈夫だと思います。今日は申し訳ないですが、整備にこの車両をお借りしても良いですか？」

「はいー。宜しく願いますー」

五人から下げられる頭を見て、これはきちんと仕上げないといかんと強く胸に刻む。取り敢えずは不調時のメーターの変化の具合をメ

モに取り、正常な時との違いを報告して貰ってから、此処から一人、静かだが激しい戦いが始まる。まずは天板を止めている頑丈なボルトを外すところから始まる。がっちりとは嵌り込んだボルトを外すのは容易ではない。だからこそ、一メートルはあるレンチを使い、まずはしっかりとボルトと噛み合ったのを確認し、腕を引くのではなく、蹴って踏み倒す様にして外す。ゆっくりとだが外れていくボルトを同じ手順で凡そ二十か所、次に重たい天板を、ミニクレーンで引き揚げ、次は後部の排気パイプを取り外す。

練習を終えて次々と戦車が車庫に戻る中、顔や頬を嚙で汚しながらもクルトの整備は続く。

「此処だな、原因は」

漸く見つけた問題の場所は、煤とオイルの汚れがこびり付いて塊となり、それが排気口へと繋がる場所を狭めた事で、熱排気が上手くいかず、エンジンの熱量が上がって動作しにくくなってしまっていた。それ以外にも、オイルタンクを燃やしてエンジンを循環させる際、そちらにも汚れがつまり、一定量のガソリンが流れにくくなっていた。加えて、何年も使いまわしにするので、熱融解でパイプの部分が溶け、そこが固まり汚れを集めてしまう原因にもなっていた。

それらを新品に交換し、漸く天板を再び接着してボルトを締めるだけの段階になれば、時刻は既に十九時。再度、がっちりとはボルトを締め上げ、滴る汗を辛うじて汚れていない部分の腕で拭いながら再び二十か所。これで一連の作業は完成した。

大きく息を吸い込み、思わずその場に腰を落ち着ける。その瞬間に一気に押し寄せる疲れと、体の内側から込み上げる様な熱。少しでもぼんやりとする頭だが、コンクリートの地面を踏む音を捉え、そちらに目を向ければ立っていたのは昼の三人。エリカ、雛芥子、直下だった。

「お疲れ様、はいこれ」

「あ、雛芥子さん、マジで助かるよ、ありがとう」

渡されたのは、冷えてはいるがやや温さがあるスポーツドリンク。だが、がっちり冷えているよりもむしろこれぐらいの方がクルトは好

みだった。手が汚れているのを考慮してか、プルタブを開けていた。一気には飲まず、まずは半分ほど飲み、少し落ち着いてから残りを一気に飲み干した。

「お、良い飲みっぷり。でもお疲れ様、凄い大変そうだったね」

「うん。本当は明日の整備点検もあるしエンジン周りは凄い手間掛かるから、今日明日を使ってゆっくりしたかったんだけど、この車両を担当してる子達が、どうしてもレギュラー入りしたくて明日も使いたいんだって」

「普通は数人でやるもんね。ほんとお疲れ様だよ、凄い時間掛かったでしょ」

「今回は排熱パイプとか変えたり掃除するだけで済んだけど、エンジンタンクの中までつてなったら、夜中まで掛かっただろうね。整備部の三人も明日は他校に出張だったから、楽な方で助かったかな」

「だからって、忙しいなら忙しいでちゃんと言わないとダメじゃない。アンタの善意を利用してはいる様なモノよ？」

「俺の仕事だからね。出来ないなら出来ないって言うよ」

それに、ああも泣きそうな顔で見られては、断る事など男として出来なかったのだ。情熱を掛けて彼女達は戦車道に取り組み、結果を出そうと必死になっている。なら、それをサポートする身ならばそれに応えたいと思った。

「それじゃあちよつと最終確認してくるから」

汚れた手を水道で洗い、パンターに乗り込んでイグニッションをオンにする。しっかりと点火したエンジンを確認し、ぎこちない動きだが、ゆつくりと交代し、車庫の外へと向かう。徐々に徐々に加速を入れ、まずはペダルを踏みこんで最高速からの急停止、エンジンメーターの上がり具合にも違和感はなく、ギアの入りにも文句はない。ぐるりと一周してみたが、メーターの動きは不審な点は無く素直な動きをしていた。慎重に車庫入れをして、工具を纏め、取り換えた部品を一つに纏めた所で、漸く大きく息を吐き出す。

「あゝ、疲れたあ。流石に一人でやるのはきびしく」

「ウチも今日疲れたよ、ミハエル君はもつと大変だっただろうけど」

「いやでも、直下さんもそうだけど、他の三人だって常に緊張感漂わせないといけないから大変なものには変わりないよ、お互い様お互い様」
「そだねえ……………あ、そういえば」

制服に着替え、校門を出た時の事だ。雛芥子が何かを思い出したかのように鞆を探る。ややあつて取り出したのは何かのチケットが四枚。

「これ、スーパー銭湯の無料入浴券あるから、帰りに寄って行かない？

バスタオルと手拭いセットだし！」

「おお！ いいねー雛芥子さん、俺は行きたい」

「ウチもウチも！」

「私もたまには行こうかしら、気分転換は大事なもの」

四人の意思が統一された事で向かったスーパー銭湯は、大きさもそこそこで湯舟の種類も多く実に人気だった。黒森峰学園の生徒寮の帰り道にあるのも人が多い理由の一つで、更には生徒手帳を持っていれば一律300円での入浴が可能だ。今回の招待券にはタオルセットに加えてドリンク一杯無料とフードメニュー一つ無料という出血ならぬ鉄血大サービス仕様だ。更衣室の前で分かれたクルトは即座に服を脱ぎ、中に入ってまずは最初に体を洗う。掛湯をしてからならOKというタイプもいるが、彼は一応のマナーで体を綺麗にしてから入るタイプだった。

先程掻いた汗とついた汚れをしっかりと落とし、さっぱりした所でまず向かったのはジェットバスだ。勢いよく噴射される水が腰や背中に当たり程よく疲れが解れて気持ちがいい。ある程度堪能した後には電気風呂で足回りを刺激する。ピリピリとした感触と、腕が強張るのが何処となく楽しく感じられる。

次は少しだけ熱めの湯舟に十分ほど浸かった後は滝湯で肩の凝りを解し、炭酸風呂で血行を良くしたところでサウナ。タオルを水でしっかりと濡らして入れれば押し寄せる熱気。ど真ん中に座り、設置されているテレビへと目を向ける。海外の戦車道についてニュースが流れており、やはり本場ドイツは激戦区なのか地域ごとの試合が熱いらしい。戦車道の海外レギュレーションは少し特殊で、ペーパープ

ランの戦車も使用可能という事になっている。

画面ではE100とマウスがまるで男の殴り合いの様に立ち並んでおり、重装甲による壮絶な撃ち合いを繰り返していた。E100の15cm砲とマウスの12.8cm砲は壮絶の一言であり、更に強化されたカーボンで事なきを得ているが、日本仕様の戦車であれば普通に乗員が死ぬのではないかと言わんばかりの衝撃である。

日本のレギュレーションでは使用不可能だが、あんな大型の戦車が出ることもなれば、各学校の戦車道もより激しさを増し、それを見て憧れを持つ人間が増え、人口増加に繋がって良い子とづくめだろう。製鉄産業も盛んになり、街の工場もより栄える。お陰で一時は荒廃していたアメリカのデトロイトも、現在では再び産業が発展して以前とは見違えた様子になっていると言う。

そんな事を考えて居ればサウナに入り過ぎたのか、少しだけ重たく感じる体に焦り、外へと出て体の汗を拭きとり、掛湯でお湯を流してから軽く水を飲む。最後にシメのジャグジーバスで体を休め、掛湯をして風呂をしっかりと堪能したクルトは、ジャーマングレーの髪を乾かし、更衣室から出てカウンターへと向かい、いつも通りノンアルコールのスタウトを無料で受けとる。夕飯時から少しズレた時間だが、それでも人は多い。メニューを見てみるが価格もリーズナブルであり、入浴をしなくても単純に食堂として利用出来る点もあるだろう。

テーブルよりも腰を落ち着けたかったので、ヨーロッパ風な建築が主な黒森峰学園艦の中でも珍しく、畳張りの座敷に座っていれば、ほくほくとした顔で三人が現れた。僅かに上気した顔立ちは普段のあどけなさを打ち消し、少女を女性へと変える魔力があった。

特に、西洋人の様な顔立ちのエリカの頬に紅が見える様は周囲の男の目線を釘付けにしてしまう程の魅力がある、だがクルトからすれば何度も見た顔には違いなく、のほほんと風呂上りで穏やかな表情のまま手招きをするだけであった。

「いや、久々の銭湯もいいね。珍しく長風呂しちゃった」

「うちも。雛芥子とサウナで張り合ってたらのぼせかけた」

「いや、普通に危ないからやめようねそれ」

雛芥子などそのまま倒れ込んで畳に頬を添えてしまっている。スカートなんだからと直下が使用済みのタオルを添えて居なければ大惨事が起きていただろう。

「何食べる？ 俺はもう腹が減って大変な事になりそう」

「具体的にどうなるってのよ」

「爆発する」

「えっ」

その言葉を聞いて、突如目の前で爆発したクルトを想像したエリカは、何故か知らないが変な笑いが込み上げた。普通であれば語る事すら忌むべき惨劇の筈だが、どうやら彼女の頭の中ではコミカルな爆破だった様子である。大方爆発の後にはアフロ姿のクルトでも想像しているのだろう。

「ウチは皿うどんにしよ」

「あたしは豚骨醤油ラーメンとチャーハンのセット。クルトは？」

「黒コシヨウトンカツのご飯山盛り。そんじゃカウンター行ってくる」

「いや、待ちなさいよ。私の分は？」

「聞かなくてもどうせ鉄板ハンバーグセットじゃないの？」

メニューにでかでかど載っている、グリル皿に乗せられた熱々のハンバーグ。逆に他に何を食うんだという、馬鹿な事を言うなど言わんばかりの視線が一気に三つ飛来する。しかし忘れてはいけない、既に昨日クルトの家でハンバーグを食べており、流石に二日連続、消費したカロリー量を鑑みても流石にダメだと判断した様子だ。

「……………サラダうどんとピルスナー」

「は？」

「フフ…………へただなあエリカ君、へたっぴさ。欲望の開放のさせ方が下手！」

ざわ、ざわ、と急激に変化する周囲の雰囲気。何故か直下と雛芥子の鼻が鋭く尖った様に見えるのは風呂上りでのぼせているからなのだろうか。否…………ッ！ これこそが真実…………ッ！ 心の内を

見透かす破魔の鏡……ッ！ 悪魔の囁き……ッ！！

「エリカが本当に欲しいのは、これ！ 鉄板焼きハンバーグ！ 少しだけ赤身の部分を熱々の鉄板でジューワつと焼いて、肉汁溢れるハンバーグを冷えたピルスナーでやりたいんでしょ？」

「だけど、それだとあまりにカロリーが張るから、こっちのしょぼいサラダうどんでごまかそうって言うんだ」

「こら、しょぼいとかいうのは失礼でしょ雛芥子さん」

クルトの忠告も無視し、なおも続く囁き。

「そういうのが実にダメ！ せっかく冷えたピルスナーとジューシーなハンバーグでスカつとしようつとときに、その妥協は浅ましすぎる！ そんなのでご飯を食べても美味しくないぞ〜？」

「嘘じゃない、かえってストレスが溜まる！ 食べられなかったハンバーグがちらついてさ……全然スッキリしない。心の毒は残ったまままだ、自分へのご褒美の出し方としては最悪さ……エリカ」

「贅沢って奴は……小出しにしちゃダメなんだ……やる時はきっちりやった方がいい……それこそが次の節制への励みになるつてもんさ……違うかい？」

「うう………うううつ………鉄板焼きハンバーグとピルスナー………」

「はいエリカ君鉄板焼きハンバーグとピルスナーおかいあげー！！」

何だこの茶番は、そう思うが敢えて微笑ましく見守る事にした。飲み物に関してはいつもの決まった三名のメニューを頭に浮かべ、カウンターで注文した後は、入浴券にスタンプを押してもらい、呼び出しの機械を受け取って座敷に戻る。既に直下も雛芥子も普段通りで、やはり先ほどの幻視か何かだろうという事にしておいた。

ハンバーグを食べ、しつかりと堪能したエリカの表情は、悔しそうにしながらも、やはり満たされた様な表情の方が強かった。

因みに翌日、自分達の取ったカロリーに気が付き、自己嫌悪する乙女が三名居たらしいが、それについては語らないでおこう。

聖グロのダーズリンさん

今日のクルトは整備部の四人で聖グロの戦車のメンテナンスを行っていた。パンターの整備前だったが、部品が予定よりも数日程遅れて届くという事で、結局聖グロの学園艦へと派遣されて今に至る。問題が無い車両とある車両はすぐに分かり、そして生真面目な生徒が多いのか、しっかりとリストアップされているので問題の箇所にくぐ取り組む事が出来るのである。

「こっちのクルセイダーのエンジン、終わったつす」

「お、流石だなミハエル。若いのに良い腕してるよお前は」

「ヴェンドルフさんにパツキンの外し方のテクを教えて貰ったからですよ」

「お前さんが身につけようと思っただけで身に付いた技術だ、教えたって受け入れなきゃ意味がねえ。自信にきな、学生なのに立派な整備士だよ」

その言葉を嬉しく思い、照れ隠しに頬を拭えば僅かにオイルの黒が肌色に滲む。だが、この汚れも彼にとっては勲章にも等しい物。まさに縁の下の力持ちとして働いている象徴の様で、鼻につくオイルの香りも彼にとっては受け入れるべきモノであった。

次に向かう車両はチャーチル、イギリス首相の名を冠するその戦車は長方形の形が特徴で、足回りも長いが速度はそれほどでない戦車だ。トランスミッションの調整に加え、起動輪や転輪と言った、履帯ではなくそれを回す部分がどうやら錆び付いているので、部分的な錆びを取り除き新しい物に変えろと言う事である。

もしこれが黒森峰であれば、その程度の事ならば自分でやれと言われるであろう部分だが、聖グロは彼等を『金』で雇い、『技術者』として呼んでいるのだ。であれば、頼まれたからにはやるのが整備士、例えば、生徒自身がやれる範囲であっても、それが彼らの仕事であるならば黙ってやるのだ。

彼からすれば文句はない、実際の戦車にこうして触れ合えるという機会がそもそも貴重、黒森峰にあるドイツ式戦車ではなく、別の国の

モノに触れあえるというだけで彼にとっては喜ばしい事なのだ。故に、地味な作業を嬉しそうに行う彼の姿を見て、聖グロの女子生徒は奇妙な物を見る様に視線を向ける。そうだろう、まるで小間使いの様な事まで喜んでるのは奴隷か何かと思われてしまう。

実際にそこまでは思っていない、彼らの仕事にはいつも感謝しており、そういった役割を変わってくれているからこそ、自分の前にはオイルの臭いではなく紅茶の香りとスイーツの甘い香りが漂うのだと知っている。だが、雑務を喜んでやっている人間を見ると、やはりそういう風な視線を向けてしまうのも仕方ない事だ。

「こんな格言を知っている?」

起動輪を外した時の事だ。そんな言葉が聞こえ、思わず手の力が抜けてレンチが足に落ちた。

「あいつたー!!!」

「優れた人は静かに身を修め、徳を養う」

「いったた……諸葛孔明ですか」

「あら、御存知でしたの?」

「まあ一応。ところで、何か用件でしょうか?」

「いえ、私の乗る戦車ですから、しっかりと見届けようと思ひまして」
「成程」

それを確認して、クルトは作業に戻る。体を車輪付きのボードに乗せて、寝た状態のまま作業する。履帯は外されジャッキアップされた戦車の下にもぐり込み、誘導輪を外して横に置き、足が見えてさらに視線を向けた時の事だった。

座ってみてれば良いのに、と忠告しようとして、そして気付いてしまった。聖グロの制服も勿論スカートである。加えてロングタイプではなくそれなりに丈が短い、元は女子高なのである意味で当然であった。故に位置、角度が幸運というか不幸にも、見えてしまった。どうやら向こうも少ししてそれに気付いた様子で、何とも言えない空気が漂う。

「……すみません、どうせなら、座って見てた方がいいですよ、って言うおうとしたんですが」

「……ええ、その忠告、痛み入りますわ」

淑女らしく、自分にも悪い所があるという落としどころで納得したのだろう。少しだけ頬を赤くした生徒、ダージリンは、近くに置いてあるテーブルへと座りしつかりと脚を閉じて、彼の作業を見守る事に決めた。驚きだったのは、恥じらいを見せた顔は年相応の少年といった感じだが、いざ作業を再開した瞬間、まるで熟練の整備士の様な風格を漂わせるのだ。

戦車道に於いて、実際に操縦する選手として、突如現れた麒麟児を西住まほだとするならば、整備士の界限での麒麟児はまさに彼なのだろうと理解した。仲間内からはあの偉大なる戦車乗りの名で呼ばれており、歳の差をなくすほどの信頼が結ばれているのが分かる。普通であれば大人の整備士が必ず付き添うであろう作業も、誰もが他の作業に集中し、彼一人に任せている。それは腕を理解し、出来ると分かっているからこそ、余計なおせっかいで時間を使うくらいならば他の作業をした方がいい、という判断である。

見ている限りでは一切の淀みなく作業を進め、黒森峰には無い車両にも関わらずしつかりと整備している。話を聞けば、黒森峰の整備部は以前から各校へと派遣されていたらしいが、彼が入学したのは今年で、今はまだ夏手前だ。全国大会を直前に控えており、各学校が戦車の整備に勤しんでいる頃合い。猫の手も借りたいので新人を使っている、という訳ではなく、やはり一人前として扱っている。となれば、いったいいつ頃から整備士をしているのかとダージリンは気になって仕方がない。

何故彼女がこうも気にするのか、その理由は単純に、整備士という存在は戦車に大きな益を齎すからだ。細かい調整や整備は当然として、パーツのみを入れ替える事での部分的なスペックアップ、改造キットを使つて別物にするなど多様性に富むのだ。

実際、黒森峰の戦車はたった二か月の間で信じられない程に強化されていると言う。勿論、以前までは細々と整備されていたが、人数が揃った今年の春から有り得ない程に伸びている。一つの車両が凡そ全体的に30%強化されたとしよう、実際に戦車道で使う戦車の最大

数は第一、第二試合は10輛、準決勝では15輛、決勝では20輛となる。この時点で第一、第二試合では以前よりも300%、準決勝では450%、決勝に至っては600%と前年度よりもバカげたスペックの差が開くのだ。しかもそれが部分的ではなく、全体がバランス良く強化されての事である。

加えて、黒森峰の戦車はドイツ本国でも非常に活発的に使用されている戦車であり、研究や完成品の発見などが進んでどんどん強化されていく。無論イギリスにも強力な戦車はいるが、それはむしろ戦後に研究が進んだからこそであり、戦時中に開発されてティーガークラスに対抗するとなればセンチリオンを持ち出すほかない。だが聖グロのOGは伝統を重要視し、マチルダ、チャーチル以外の戦車を何故か認めない。クルセイダーですら最近漸く認められた異端児である。

戦車ごとにスペックが違うのは当然だ、劣っている部位があるからこそ、相手が劣る部位に対して優れている点を押し出し勝利を挽ぎ取る行動が生まれる。例えばマチルダは主砲性能の連射性が高く、また装甲の硬さを活かせるが、速度が遅いため高機動戦闘に持ち込まれては勝ち目がない。

イギリスの戦闘ドクトリンに則るのであれば、支援砲撃による疑似的なフランクス形態を取り、強固な装甲を活かして手数で押し切るという単純明快なモノ。だが黒森峰相手にそんな事をして、実戦的に動くのが目の前で固まっているだけの状態になってしまう。自慢の装甲も、より強化された主砲によって以前よりも容易く撃ち抜かれ、既に彼の者等にとっては脅威にすらなり得ないだろう。そんな状態に押し上げたのが、たった一人の生徒が加わった事が原因だなど信じたくも無い現実である。

確かに大人である教師に対し、生徒側は話しづらいというのは分かる。だからこれまでは、戦車道を担当する教師に整備願いを出し、それを受理するだけだったのだろう。しかし、生徒という身近な形で現れる事でより現実的な要望を聞く事が可能になり、多少の我儘や、整備に不可の気軽な確認が可能になり、それらが結果的に生真面目な黒森峰の生徒を後押しする形となった。

たった三か月、されど三か月。本格的に入学する四月より前、体験入学の時点で既に整備に加わっていたら？ 最初期に細々としたチューンアップが認められてその時点で整備していたら？ 今、黒森峰の戦力を考えるとゾッとする。短期間でそれだけの事を成し遂げた黒森峰整備部の存在は計り知れない事となるだろう。

事実、目の前で朝から行われている整備も、昼前の時点で既に二十輜近くが不備のあった点を整備されて新品同然となっている。これらに更に強化を施すとなれば、三か月もあれば十分。黒森峰に入学すると言う事は以前から陸地で分校に通い、戦車の特性も理解している。手掛けるのも容易い。

(……欲しいわね、整備部。四人全員とはいかずとも、彼一人を受け入れる事で我が校に吹く追い風の強さは計り知れない)

もし彼が居れば、時間は掛かるだろうが少なくとも来年には、確実に以前とは比べ物にならない程の戦車部隊が完成する。実に欲しい。恋愛と戦争では手段を択ばないイギリス人の系譜である聖グロの生徒として、学園艦の生徒としての血が騒ぎ出す。聖グロは黒森峰の共学化に煽りを受け、検討が進んでいる最中だ。試験データとして彼を受け入れる事が出来れば実に大きい。黒森峰の整備部も要請で数日間借りる事でより大きな力ともなる。

そう考えれば、先ほどの惜しいと思える。恥ずかしさはあるがたかが布一枚。見せつけて色仕掛けにでも落とせば良かったかと後悔する。偶然にも今日はそれなりに勝負出来るモノで、ドイツには隠れてしまうがデニールは低いので割かしはつきりと見える。

一回の印象で男は女を見る目が変わる。思春期の男は色仕掛けで容易く落ちると彼女は冷静に判断した、だからこそだ。先ほどまでは意識していたが、閉じていた足を僅かに、やはり羞恥心はあるがわざと広げる。今の状態であれば俗に言うチラリズムという奴で、スカート影が僅かに邪魔をして見えているのか居ないのか判断が難しい所。そこから、本当に指二本分程度のスペースを開けてスカートを伸ばせば、トラップゾーンの出来上がりだ。

さて、これでどうだと、半ば血迷ったダーズリンが視線を向けるが、

彼が熱視線を向けるのは悲しい事にチャーチルの転輪とビスである。わざとらしく急き込んでも、一切興味を示さない。これだけはやりたくなかったダーズリンだが、意を決して近づく。もはや淑女とも呼べないが、彼女は彼女なりに未来を見据えての行動。今年中には敵わなくとも、来年、再来年であれば、という気持ちを含めての行動。

「もし、宜しいですか？」

しゃがみ込む、普通であればスカートを前側に寄せ、脹脛から足首で固定してガードする。だがそれをしない事でどうなるか、大絶景の完成。

「どうしましたー?」

しかし腹立たしい事に、彼は整備の為に目線を戦車に向けたまま作業している。女性と話す時ぐらいはちゃんとこつちを見ろと内心で悪態を付いた。

「いえ、整備の進み具合について聞こうかと」

「そうですねー、後は転輪を固定して履帯を付け……ればこの車両の整備は完了です。後こういうのはあんまり言いたくないですけど、下着が完全に見えちゃってるので気を付けた方良いですよ」

しれっと注意され、何事も無かったかのように作業に戻る。そしてダーズリンは戦慄した、もしやこいつ、性癖がアレな方かと。思わず整備部の三名に慌てて視線を向け、見れば見る程確かに、ダンディである意味同性受けは良いであろう三人を見て納得した。とんでもなくクソ失礼な思考だが、彼女の中ではクルトはホモに認定されかけている。

実際の所は昔からエリカで起きたハプニングで慣れたお陰で動じないだけ、内心ではとんでもなく動揺している。その証拠にビスを取り付ける作業で妙にてこずっているのが証拠だ。だがダーズリンは気付けない。

「後は履帯だけで作業終わりです、それじゃ自分はこれで」

そそくさと離れていく姿を見て、ダーズリンは闘争の炎を心に燃やす。何が何でも彼を手に入れて、聖グロに栄光を齎してやろう、と。因みに落とし穴として、彼女達が頑張つてオイル塗れになりながら整

備すれば、時間はかかるが実現可能なのだが、今のダージリンは悪い意味でも盲目でもあったのだった。

「今日は難しい所が無くてさっさと終わりそうだなあ」
「つすねー、問題個所を最初から教えてくれるのでとつかかり安いつてのもある気がします」

現在、昼時に四名はファミリーストランで食事を摂り終えて休憩中である。喫煙席に座る三名は手早く作業が終わった事をぼやいており、ヴェンドルフの発言にクルトが同意した。

「そういや、さつき聖グロのお嬢さんからアプローチ掛けられてたよな？ ミハエル」

「ああ、あれですか。単純に整備の具合を聞かれてただけですね」

「何だ面白く無いな。学生なんだからもっと恋にも注目してやれよ、戦車を口説いたって帰って来るのは砲撃だけだぞ？」

「余計なお世話っすよカリウスさん、俺は今別になんかそういうのは興味無いんです」

「興味無いって、女が嫌いとかじゃないんだろ？」

リツベントロップの言葉には頷く。それは勿論当然だ。因みにだが、クルトの初恋というより、興味を持った相手は実を言えば、子供の頃、テレビや雑誌で取り上げられていた現島田流の家元である島田千代であり、密かに危うい道を走りかけていた過去は誰にも話していない。話せない。とは言え、もしこの三人にそれを言ったとしてもわからないでかと返って来るのは間違いなかったが。

「後は単純に余裕も無ければ、恋愛関係になるのかなって風には見れないんですよ」

「所謂、お友達の延長って感じか」

紫煙を吐き出したリツベントロップの言葉に頷きながらコーヒーを一口含む。人並の恋を試してみたいと考えても、そういう相手もいなければ感情にもならない。

「あのお嬢ちゃんはどうなんだ？ 逸見エリカちゃん、ずっと付き合いたい長いんだろ？」

「確かにエリカに一時期は惚れた事もありましたよ。けど、その状況が続きすぎたら今度は何だろう、親友的な感情が湧き初めまして……」

「あく、そうか、そつちに移つちまったのかあ」

「あれつすよね、家族愛的な方つて奴」

「そうですねえ」

若人の恋愛はこうも難しい物だったのかと大人三人は思わずため息を吐く。普通、此処まで付き合えばお互いを強く意識する時だつてあつた筈だ。現にクルトはそうなつてゐる。だが恐らく、エリカという少女は戦車を見つめ過ぎてクルトの本心を寸での所で見ることが出来なかつたのだろう。それは悪意でもなく、友達という善意が邪魔をした、運命のいたずら。彼女は確かにクルトを信賴しているのだらう、でなければ家に上がり込むなど普通の女の子であればまずはない。結果的に、彼女からすれば兄妹や家族の様な意識にすり替わり、結局は今のクルトと同じ感情に落ち着いてしまったのだろう。

「まあアレだ、これから先長いし相手は落ち着いて見つけて行けよ。顔は良いから卒業までには見つかるさ」

「良い顔してますかねえ？ どう考えてもそこらへんの人つて顔ですよ？」

「本人はそういう意識なもんさ。顔に関しては他人の言葉の方がよっぽど説得力があるつてのも忘れるなよ」

「はあ……」

腑に落ちない様子でコーヒを飲みながら、あまり真に受けられない様に留めておく。クルトという人間は、自己評価が低い人間だった。自分よりも優れている人間を間近で見育てた故に、自分程度の者など幾らでもいるのだと自惚れないための指標としてエリカを立ててゐた。海軍五訓戒の様に、忤らず、恥じず、缺らず、憾まず、亘らずを教訓とし、常に自分を高める事を意識し過ぎて、自分に対して逆に卑屈になつてゐる点もあつた。故に容姿を褒められたところでお世辞にしか思えず、自分程度の顔で良いというのであれば、この世には恋人がいけない悲しい人間はもっと少ないはずだろうと考えてしまうの

である。

尤も、自分で見た自分と他人から見た場合ではまた評価は変わる。確かに内面性はクルト自身が分かっているが、一見だけではそれを知る事は出来ないとなれば、まず向かうのはその顔立ち。高校一年生でありながらそれなりに大人びた見た目と雰囲気、ジャーマングレーの髪はまるで第三帝国の鉄血軍人を思わせる。肉体も整備士故に、やや細身ではあるが、その内側にはしつかりと鍛え上げられた肉体が隠れており、プロポーションは良い。それを言ったところで彼には全てお世辞と受け取られてしまうだろうが。

「にしても、ミハエルも良くブラック飲めるよな。俺がミハエルくらいの歳だった時はカフェオレじゃないと飲めたもんじゃなかったぞ？」

「まあヴェンドルフさんの言う通り、俺だつて前までは飲めたもんじゃないって思っていましたよ。でもエリカが大人の真似して飲んでるのを見て、試しにとって市販のを飲んでみたら、案外と水っぽく感じて今では慣れちゃいました。インスタントとか市販の缶コーヒーだからこそその質をそこそこに飲みやすさを追求した結果ですね」

「ふうむ、そんなもんかねえ？」

「ええ、今では食後に飲むこの苦さがすつきりして逆に良いぐらいです」

「そうなるとお前さんも煙草とか吸いそうだなあ、食後の一服、吸い続けていると溜まらなく美味く感じちまう」

「あ、煙草は今の所吸うつもりはないです。エリカが嫌ってるんで」

その発言をして、何で恋人じゃないんだと突っ込みそうになつて、三人は諦めた。普通、ただ友達や親友が煙草の臭いが嫌いだというだけでは、別にいない時に場所に気を付けて吸えばいいだけの話である。彼の口ぶりからも、それが無ければ吸うのも特に嫌う様子は無かった上に、現に喫煙者三名と同席している状態だ。

「ま、お前さんの自由だ。酒に煙草にギャンブルに女、大いに結構。自己責任で好きにやればいいさ、どのみち体に良くないモンなんて若からうが老いてようが変わらん。俺はミハエルが煙草を吸おうが酒を

飲もうが咎めるつもりはないぜ、勿論未成年でも、な」

「そこは注意しましょうよ、監督不行き届けて扱いで怒られるのは皆さんなんですから」

「それが言えるならお前さんは大丈夫って事だよ」

「いてっ」

隣に座るカリウスからの激励に咎める様な視線を向けつつ、その勢いで時計へと向かった。時刻はもう少してランチタイムを過ぎる頃。休憩の時間も終わりに近づいていた。

「おっし、それじゃあそろそろ行くか。最後に仕上げてさっさと帰るぞ」

「おっす」

「ういっす」

「分かりました」

「うあっ」

思わず跳ね起きて、周囲を見る。そこで気が付いた、何で自分は自室にいるのだろうか、と。間違いなく自分の部屋であり、この場所が黒森峰学園艦というのは間違いない。しかし、クルトの記憶が確かなら、聖グロで仕事をしていた筈だった。そして、床に無造作に投げ置かれていた鞆を見て思い出した。

確かに聖グロでの整備は恙なく終わった。のだが、試験運転の際、クルセイダー担当組が初手からリミッターを外して走行し、エンジンが爆発。計五台のエンジン総つかえという地獄が始まり、後ろで平

謝りをする聖グロ代表車長の声すら耳からすっぽ抜けながら整備していたのだ。予備でエンジンがあつたのは助かったが、逆にそのせいで長引いたとも言える。結果的に、気付けば学園艦に戻っており、眠ってしまったのだらうと察した。

死ぬほど疲れたという言葉は簡単に言えるが、まさか本当に死にそうになるとは思わなかったと溜息をつく。もはやどうやって帰ったからすらも記憶になく、最後の最後にエンジンを取り換え、動いたのを確認した後から何一つ覚えていないのである。

喉はカラカラで口の中がべたべたして妙に気持ち悪い。口の中をオーラルクリーンジェルで軽く掃除した後時計を見れば、朝の七時。何も食わずに眠ったせいで空腹感がもやもやと動く。幸いだったのは今日明日は休日という点だらう。

あまり朝からがつつりと食べるのも胃に悪いので、冷凍庫から鶏ガラスープを固めて置いた袋を取り出し、鍋に少しお湯を張ってゆつくりと溶かす。

「お邪魔します。って、アンタ起きてたの」

「あれ、何しにきたのエリカ」

「昨日家に行ったら死んだ様に寝てたから様子見に来たのよ。寝ぐせ凄いい事になってるわよ」

「おっと」

手で確認すれば確かに、真横に跳ねて耳の様になっている。とは言えそもそもエリカが来る事が想定外だったので、食事を済ませてからでもいいかと開き直る。

「朝飯どうする?」

「食べる」

「あい」

程よく溶けた鶏ガラスープを袋から取り出し、シャーベット状のそれを溶かして炊飯器の中を見る。どうやらエリカが炊いてくれたらしく、三合ほど入っている。冷蔵庫からネギと卵、解してある鳥のササミを取り、鍋に塩を一つまみ、醤油を小さじ半分、ごま油を数滴入

れて混ぜ、刻んだネギとササミを入れて軽く煮込んでから、茶碗二杯分の米を投入。ぐるぐると解し混ぜた後、一旦強火にして煮立ったのを確認してからタマゴを回し入れれば、ふんわりと白と黄色のタマゴが浮かび上がる。

少し厚手の器に入れ、白ゴマを振り掛ければ完成だ。

「あい、昨日から何も食べてないし今日は雑炊的な何かにしてみた」
「私はタイミング良く来ただけだし別に文句はないわよ。いただきませす」

朝食らしいといえばらしい。薄らと香る香ばしいゴマ油に、ネギの薬味と鶏ガラスープのやさしき。塩気も程よく、タマゴがまるやかで思わず次々と蓮華が進んでしまう。ふとエリカが目の前を見れば、よほど腹を空かせていたのか、一心不乱に食べ進めて既に丼を殻にしているクルト。冷蔵庫からヨーグルトを取り出して更に食べている。

「朝からどんだけ食べるのよ」

「仕方ないじゃん、昨日疲れて眠ったままなんも食べてないんだから」
「そんなに大変だったわけ？」

「というか、緊急事態が起きた」

「緊急事態？」

「整備自体は終わったんだけどさ、テスト運転してる時にクルセイダー運転してた人がリミッター外して、エンジン爆発して五台分総とっかえ、その前までの整備が楽だった分あれは地獄だったね」

「うわぁ」

想像したエリカは思わず顔を顰めた。試合中、背後から撃たれてエンジンが爆発する事は多々あるが、回収されていく戦車を見れば実に痛ましく思う。そして思うのだ、これを整備するとなればどれだけ時間がかかるのだろうか、と。実際に目の前で整備してる人間がいるが、あの疲れ様は相当だったんだろうと考える。それまでの整備は楽だったと言うぐらいなので、やはりエンジン周りにはてこずるのだろうか
と察した。

目の前でもりもりとヨーグルトをお代わりするだけでなく、普通にホットドッグを作って食べている事からも相当な空腹だったのは間

違いない、そしてそれだけ消耗したのだろう。

「まあ、お疲れ様。それじゃ私戻るから」

「え、何しに来たの？」

「だから様子見に来ただけって言ったじゃない」

「そうだった、ばいばい」

腹を満たした事で余計に感じて来た眠気、もはや挨拶も適当になり食器を片付けてもぞもぞとベッドへと向かう。未だにほんのりと暖かさが残るベッドは何とも言えない心地良さがあり、そのまま死んだ様に眠る。

昼、エリカが様子を見に来た時は、実に気持ち良さそうな寝姿に、そっとしておこうと考えたとかなんとか。

外出先の雛芥子さんと西住さん

学園艦とは文字通り艦、つまりは船である。日本各地の土地や場所をなぞっているだけあってその数は多い。此処で気になるのは当然、食糧事情についてである。陸地にて購入したとして、そもそもそれが消費されるのは一般家庭。学園艦に於いて肉の備蓄はどうなっているのか、と言えば、答えは簡単、畜産でしっかりと補っているのだ。

学園艦は空母の形をしており、それぞれ各ユニットごとに役割が変わる。最上部の表面ユニットは言うなれば居住区、つまりは一番わかりやすい学園艦の表の顔と言えるだろう。更にもう一つ下層のユニットに進めば、人工的な太陽光などを取り入れた畜産ブロックとなっており、最上部ユニットだけで一つの市の人口と同じ、もしくはそれを上回る人が生活できるのだ、その土地をまるまる畜産に使用出来るため、肉の供給自体はしっかりと整っているのである。当然、冷凍された肉なども保存されているので万が一の場合の備えもある。

もう一つ下に向かえば魚類の養殖を行っており、更に下はエンジンやブロック、ユニット整備などを行っている専門の人間がおり、普通に学園艦に暮らす人間は関わる事のない場所であった。

なので、陸から孤立したという理由だけで物価が上がる事も無く、また、生徒一人一人がアルバイトを行ったり、国の人間の面談や診断を受けて適正とされる仕事が割り振られたりされているので一人暮らしも可能となっているという仕組みだ。レストランでも、厨房には成人だけでなく学生の姿も多く、スーパードパートの店員、美容院等々、若い人間であろうともしっかりと労働力になっている。

こうして培われた技術は本土に戻っても活かす仕事となり、再就職を斡旋される事もあれば、そのまま学園艦で今度は成人として仕事をし、新たに加わった後輩を教育する道もあるのだ。

勿論国からの支援もあり、学園付属の寮は基本的に家賃は取らず、最低限の水道光熱費といった部分の支払いのみの場合や全額免除など地域ごとで変わって来る。そうでなければ学生の一人暮らしなどは基本は無理だ。仕事をしていない生徒に関しては、親からの仕送り

だったり、国から配布された簡単な内職をクリアする事で報酬が支払われ、それをもって支払いとする。

故に少し苦しい生活になる事もあるが、基本的に、衣食住に困る事はなく、娯楽に少しだけ我慢が必要になる程度、といった貧困具合でむしろ恵まれた場所と言っても過言ではないだろう。

だからこそ逆に、専門職に就いている生徒は、忙しさはあれど支払われる報酬は多く、学生であれば家賃を必要としないので大分余裕のある生活が可能となってくる。

「おいすく、ミハエル」

「雛芥子さんおっすおっす」

待ち合わせ場所のモノレール駅前にいたのは、やや黒みがかった茶髪の雛芥子。白のチュニツクに首元はトレードマークの赤いスカーフを巻いている。ボトムはジーンズで健康的な彼女のイメージにぴったりの服装。

「おく、ミハエルの私服って初めてみるかも。いつも制服とツナギだから新鮮だあ」

一方のクルトは白のメンズシャツをオープンにし、首にはドッグタグ型のネックレス。ボトムはベージュのチノパンに黒の革靴。資金に余裕がある為つい最近買ったばかりの服である。

「まあちよつと前に買ったばかりだからねく、どうせなら着ようかなと」

「似合ってる似合ってる、それじゃあ行こうか」

歩き出した二人を見れば、まあ誰が見てもカップルだろうと判断する。通りがかった独り身の女性が、若々しいカップルに微笑ましさとほんのわずかな嫉妬が混じった目線を向けた点からもまず間違いない。だが二人は当然そんな関係ではなく、お互いを別にさほど意識もせず、単純に買い物に出かける為に向かったのだ。

この発端はつい昨日、部品が届き、全国大会に向けたパンターの改造キットを二日掛けて整備し、漸く終えて大きく溜息を吐いたミハエルに、普段から世話になっているから、と雛芥子が呼び出したのが発端だ。彼女にとっても買い物用の事もあったし、そのついでに労え

るのであれば一石二鳥。

クルトとしても気分転換に良いだろうと言う考えでそれに賛成し、最初はエリカを誘おうと思ったのだが、女子が多いと気まずいという点、期待が込められ次期副隊長として目を掛けられている分、より練習に力を入れている。休みの日くらいはゆつくりして貰おうと考えた結果、今に至る。

とは言えエリカからすれば別に呼び出しは気にする事でもなく、実を言えば彼女も彼女で気分転換に外出していた。彼女を気にかけているまほからの呼び出しとなれば飛び起きてでも向かうべきという判断だ。

「映画でも見に行く？ 午後は買い物したいなくって思ってたんだけど、どう？」

「別に大丈夫だよ。見る内容は雛芥子さんにお任せしようかな」「任された!!」

映画館に向かい、上映中の内容を確認した雛芥子は、これだと目を付けてカウンターへと向かった。選んだ映画は、第二次世界大戦中、第三帝国の指導者だった人物が、死んだ筈なのに現代へとタイムスリップしてしまうという内容。以前から興味はあるという話を雛芥子としており、まあこれだろうなと確信しながら戻って来るのを待っていたれば、やはり案の定ソレである。

次に向かった先はフードコートのお店だ。映画と言えばやはりという事で欠かせない。

「雛芥子さん、どれにする？」

「ん？ え？ いや、いいよ、逆にウチが出すからさ」

「大丈夫、こうして外に連れ出してもらってるだけで充分労って貰ってるから。それにチケット代、出してくれたんでしょ？ これぐらいは払わせてくれないと立場が無いから、ね？」

「うーん、分かった。ここで問答しても雰囲気悪くなっちゃうもんね。そうだなあ……ジャーマンポテトとホットドッグにスタウトで！」

「結構ガッツリと食べるんだね？」

「朝、遅刻するかもって急いでたから実はお腹ペコペコなのです。お

昼前だけど充分入るよ!!」

「そっかそっか」

雛芥子の分のジャーマンポテトとホットドッグ、ノンアルコールのスタウトを購入し、クルトは定番のポップコーンとミニピースのピザ、そしてスタウトを選択。これであれば、雛芥子とシエア出来ると判断したからだ。上映まで残り一分という所で購入したのでどちらとも出来立てで熱々、座席は広い間取りを取れるツインソファなので、トレイを置くスペースにも余裕があり、ちょうど二人の間に置く事が出来る。

「雛芥子さん、食べたかったら勝手に取って食べてもいいから」

「ん、ありがと。こっちのものも、食べていいからね」

「サンキュー」

お互いのフードをシェアしながら映画を見て、隣からポップコーンを摘みながら雛芥子は横目でクルトを見た。顔は悪くない、むしろ良い方であり、学園に来た雰囲気の暗い男子生徒よりもマシと言える。根は真面目だし人当たりも良く、気配りもきちんと出来ておまけに戦車に関わる同士。整備士なので支払われる給料も多く、エリカの話聞けば大型PCを買う資金だけでなく、電化製品もきっちり揃っているという状況。間違いなく、学生寮を出ても一人暮らしを出来るだけの余裕は間違いなくあり、普通であれば女子からすれば人気物件は確定であった。

(……でもやっぱり、良い友達って所で止まっちゃうんだよね)

雛芥子も、考えなかったという訳でもない。しかし、彼と付き合えば付き合う程、恋愛という枠を飛び越え、親友といった、友情に近い方を強く感じてしまうのだ。故に今日出掛ける事も、デートというよりは友達と遊びに行く感覚でしかなく、逆にデート扱いするのは彼に対して失礼だと感じてしまう。それに。

(どうせなら、エリカと付き合ってた欲しいよねえ)

彼女とも顔馴染みで、つつけんどんな癖に素直になれない典型的なツンデレ系女子、エリカと上手く結ばれて欲しいと考えてしまう。雛

芥子はエリカも、クルトも大好きなのだ、だからこそ、その二人が恋人になったとなれば心の底から嬉しく思える。

(ま、今は無粋な事考えない様にしとこ)

こういった邪推も彼にとつては失礼な事かもしれない。雛芥子は映画に集中しながら、フードメニューをすらすらと口に運びながらしっかりと堪能するのであった。

「いやあ、面白かったね」

「途中、ドキュメンタリーみたいの人に話を聞いて今の政治について尋ねるシーンとかすごかったね。あれ実際に、エキストラとかでも何でもなく、通りがかりの人との問答を撮ったシーンをそのまま使ってるんだって」

「成程、だから中指立てた自転車のおじさんとか居たんだね」

「ある意味で、あの作品自体が、登場人物がプロパガンダとして作ろうとした映像作品って考えれば納得かな。そういう所も面白かったね」

お互いに映画の感想を話しているところなど完全に恋人が行うソレなのだが、二人からすればそんな考えなど皆無なのだから疑問である。喫茶店の窓際席でやっているのも中々に悪目立ちだ。故に、ふと喫茶店を向けば彼らが映るのだが、街中を歩いてたとある三人組は、それを目にしてしまった。エリカ、まほ、みほの三人である。

同じタイミングに外を出ていた彼女達がそれを見て何を思うか、当然一つである。エリカを除いて。普通であれば、此処は声を掛けず何も見なかった事にしようという考えが起きる。だというのに、何故かエリカはずんずんと大股で近づいていく。何故か、何処となく、小さな怒りも見てとれた。

「それでさ〜……ん？」

こつこつ、と控えめに窓を叩く音が聞こえて、横を見る。腕を組んで立つワンピース姿のエリカ。だが此処で一つ言いたいのは、この喫茶店は入り口が下、つまりは若干地面から降りる形となる。故に高さの関係から彼女を見上げる事になるのだが、隠すつもりもないおっぴろげな状態に、雛芥子は思わず拍手を送りたくなる。

取り敢えずクルトはメールで手早く送信。水色、とだけ送って、指を下につつくジエスチャーをすれば漸く意味を理解したのだろう。何事も無かったかのように、すつと足を閉じて店に入って来る。淀みなくクルトの隣に座り、まるで最初から一緒だったかの如くコーヒーを注文していた。

それに困惑するのは西住姉妹である。そこで介入するのか、とか、何で少し怒っているのか、とかいろいろあるが、考えた結果、取りあえず仲に入ろうと決めたらしい。

白いシャツにデニムととてつもなくシンプルなまほの服装に対し、みほはキュロットスカートに三分丈シャツのラフな格好。とは言えワンポイントで白い帽子をかぶっているのもそれなりに意識はあったのだろう。

彼女達は、すまない、と一言添えてから雛芥子の側に座る。

「んで、何で二人で出掛けてたのよ」

「パンターの整備終わったからその労いに遊びに行こうって雛芥子さんに誘われた」

「何で私を呼ばないのよ」

「練習で疲れてるかなって」

「どうだか。本当は女子二人と出掛けて浮かれてたんでしょ」

「ちよつと、俺は良いけどそれは雛芥子さんに失礼でしょ。せつかく善意で呼んでくれたのに」

唐突に険悪な雰囲気になる二人、さて、置いて行かれたのは三名である。唐突に痴話喧嘩が始まったので仕方がない。二人の会話は出来立てのカップル同然、しかしこいつら、付き合っていないのである。ふざけんなこいつらと言いたくなかった気持ちを雛芥子は何とか奥に追いやり、ミルクカフェオレを飲みこんで、なるべく落ち着いた声色を意識して口を開く。

「まあまあお二人さん落ち着いて、まるでカップルみたいなやり取りになってるけど」

「え、何処が？」

「カップルではないでしょ」

次の演習はティールガーIIの履帯とエンジンを徹底的に狙ってやろう。そう決心する雛芥子であった。

「エリカ、それぐらいにしておけ」

「た、隊長……？」

「ミハエルはお前の事を気遣って声を掛けなかつたんだ、そこを汲み取れば感謝の言葉はあれど、罵倒する理由にはなるまい。それに、二人で出掛けている事を咎める理由もお前にはない、そうだろうか？」

「うっ」

「ミハエルも、責任は無いとはいえ、男女で出掛ければこういうトラブルも起きる。特にエリカと付き合いが長いだろうか？ まあ、恋人ではないにしろ、やはり知り合いにそういう関係らしき相手が出来ると気になってしまうものだ。一応、覚えておいてほしい」

「よくわからないけどわかりました」

「どっちやねん」

雛芥子の突っ込みにみほは乾いた笑いを返す。彼なりの落としどころという事なのだろう。取り敢えずドリンク一杯で喫茶店を切り上げ、此処からは五人で行動する事になった。こうなると気まずいのはクルトである。そもそもエリカを呼ばなかったのは、彼女を呼べば必然的に直下も呼ばなければならない。そうなると男女比が偏って気まずい思いをする。

そうならない様に、顔見知りである雛芥子だけに絞ったのだが、それを今更言い出せばまた面倒な事になりそうだと思いい口に出来ない。女性陣がきやつきやと話す中、一步後ろに下がった位置でなるべく気配を消してついていく。

「あの、大変でしたね、さつき」

「ん？ ああ、みほさん。いやまあ、仕方ないって言うしかありませんね」

そんな中、みほも同様に一步下がりがクルトに合わせた。彼女としても、この組み合わせは少し緊張したらしい。1対1の方がいいと考えての行動。

「みほさんは良いの？ 俺なんかと話してて」

「えっと、その、まだ緊張しちやつて」

そういえば、とクルトは思い出す。一年生になっていきなり副隊長に任命された彼女だが、実は彼女に関しては黒森峰高校以前から知っている。中学校でも戦車道を行っていたエリカに付き合う形で、よくまほの話とみほの話は聞かされていたのだ。その当時はまだ整備士ではなく、街の工場で時折触らせて貰う程度だったために直接関与する事は無かった。

しかしエリカからは、当初は、妹というだけで優遇しているのではないか、声に張りが無くて自信の無さそうな所が副隊長として相応しいのか、などと愚痴が漏れていた。彼女と同じ考えの生徒も多かったのか、二年生ぐらいの時までは皆にそう思われていたらしい。そこから、まほに憧れると同時に嫉妬を覚えた一部の生徒が、彼女を嫌っていたのも記憶にある。

そういった生徒もほぼ丸ごと黒森峰に移ったので、多少の変化はあれど、ほぼ同じ面子と言っても過言ではない。そういった境遇から、年下に副隊長をかつ攫われた形となる上級生からすれば面白く無いのだろう、故にやはり一年生という立場では居心地が悪いという事なのだろうと察する。

中学三年、高校二年の部ではまほが居たので直接的な嫉妬の声は無かったが、やはり三年生が存在するとその時を思い出してしまうのだ。

「みほさんはもうちよつと自信持つてもいいと思うよ。総隊長の妹だからって理由じゃなくて、みほさんが優れているからこそ副隊長に任命されたって殆どの人は分かっている。それを知らないのは単純に、理解していないか、みほさんがどれだけ頑張ってるかを分かってないアホなだけ」

「あ、あほ……？」

「アホでしょ。目先のどうでもいい事に眩んで本質を見抜けない人間なんてそもそも人の上に立つべきじゃない。そういう人間はね、必ず自分の下に立つ人間も巻き添えにするんだよ。これまでの歴史に存

在した暗君や愚昧な宦官、将軍が証明してる。優れた人間は必ず嫉妬されて、足を引つ張られてもなお、それを振り払って輝くからこそ認められて英雄になる。みほさんも、振り払う自信を持つといいですよ」

「振り払う、自信、ですか」

「優しすぎてもダメって事ですよ。みほさんの優しさは美德だけど、そこに付け込んで、調子に乗るだけです。厳しさがあるからこそ優しさがより際立つ、あなたのお姉さんがそうじゃないですか？」

「お姉ちゃんが？」

「ええ。まほさんはよく人を見ています。一人一人の名前を憶えて、何が得意で何が苦手なのかをしつかりと把握しています。隊長として厳しい一面を見せながら、それと同時に西住まほという一人人として、それに向き合う優しさもあります。だからこそ隊長になっています。」

人の上に立つ人間に必要なのは人徳、カリスマです。みほさんにそれが無いとは思えません。だから、自信を持ちましょう。間違っていたらそれを次から正せばいいんです、ちゃんと、間違った事は間違っていると言ってくれる仲間はいる筈ですから。守ってくれる人が近くに居ないなら呼べばいいんです、少なくとも俺とエリカはすぐですつ飛んでいきますよ。大丈夫です、戦車持ち出して来たらエンジンバラして動かせない様にしてやりますから」

確かに、とみほは思う。姉であるまほは、何かあった時は必ず一人一人を呼び出して面談を行っていた。何処が良くて、何処が悪いのか、そういった事を話していたのは何度も見た事がある。悪い点には改善方法や代案を示し、良い点についてはしっかりと褒め、その部分を伸ばす為のアドバイスも行っている。

だが、自分はどうか。副隊長と言っても、演習の際に作戦を述べた時、こうした方が良いのではないかと言われた事がある。だが、それは既に織り込み済みで、相手はむしろその点を突いて来るのは間違いないからこそ立てた作戦だ。しかし、その咎める声に同意する者が増えれば、徐々に自信が無くなり、本当は危ないんだと分かっている

それに後押しされ、採用し、負ける事がある。

そして決まって上級生に言われるのだ、普段強く言われているから副隊長の立場を利用して、私達を意図的に貶めようと作戦を採用したんだ、と。

そんなつもりはない、むしろ最初の作戦に口を出す形で被せて来たのはそっちじゃないか、と思っけていても言い出せない。上級生だから、先輩だから、押し通せなかった自分が悪いから、と強迫観念に追いやられ、言い返せない。そうして黙っていると、やはり貶める気だったんだ、と更に強く言われる。違うと訂正しようとしても後の祭り、それに同調した、みほを好まない生徒が更に声を強める。

悪質なのは、まほは相手チームであり、状況終了後の軽いミーティングを行っていて、彼女をカバする生徒が偶然いなかったという所だ。これに関してはチーム割りが偶然こうなってしまったのだが、だとしてもみほからすれば辛かった時間には違いない。

整備士なめんな、とレンチを握る素振りを見せながらボルトを外す動作を見て、みほは小さく笑う。何気ない会話だが、今日は外に出て良かったと思えたのだ。

「……ありがとうございます、ミハエルさん。そういう所が、あのエリカさんと恋人になれた理由なんですな」

「え、今そういう話の流れだった？ あと普通に違うからね？」

「大丈夫です！ 私はちゃんとわかってますから」

「分かってないね？ あと話聞いている？」

「聞いてます！」

「聞いてないねこれ」

今日、漸く心の底から笑えたみほに対し、困惑するクルト。本当に話を聞いてくれているのだろうかと何だか不安になるものの、駆け出す彼女に置いて行かれない様に後をついていく。

彼女達が向かったのは洋服店。此処に関してはクルトの仕事は一切無いので店の外で待機するばかりである。はてさてどうするか、と座っていれば、再び隣にみほが座り出す。

「あれ、中で買い物しないんですか？」

「私は今は欲しい物ないから。ミハエルさんは何か欲しいものとか無いんですか？」

「んー、アクセサリーとかちよつと見たいかなあ。後は戦車の中身について詳しく載ってる本」

「じゃあ、見に行きましようか？」

「へ？」

すつと離れたみほが、ややあつて戻つて来る。にこにこ笑顔な一方、クルトの表情は困惑の色が一切離れない。むしろ、何で？ という気持ちが強まるぐらいだ。

実を言えばみほ、黒森峰に来てから学友に恵まれる、という事も無く、少しだけ寂しい生活を送っていた。エリカや雛芥子、直下や同車に所属する赤星など会話をする相手はいるが、友達のような関係とは呼べず、顔見知り程度で軽く挨拶をする程度。

おそらく、この黒森峰学園で姉の次に会話量が多いのはミハエルであった。以前食堂での一件以来、整備状況についての会話をしたり、ティーガーの改造キットの会話などを挟んだのも切っ掛けだろう。それに、整備した後の性能を把握するのも副隊長としては重要な役目であり、そういった点から次第に、彼女からすれば仲の良い友達として認定されてしまっている。そうになると、本来は人に懐きやすい彼女の行動力は強い。

気付けば彼女に連れられて、アクセサリーショップへといつの間にか到着していた。あれれーと思う間もなく、ぐいぐいと引つ張られて今に至る。こんなに行動力あつたっけと思うのもつかの間、まあ良いかと諦めて中を見た。

アクセサリーショップは値段がピンキリではあるが、やはりピンと来る品は少しだけ値段が張る。買えない物は別に無いが、もうちよつと安い物は無いかと探せば、更に好きな物が見つかり、そして値段が吊り上がって行くのである。カードを持ってるので支払いは問題無い。報酬が振り込まれるのも数日後でかなり余裕はある。

取り敢えず数個ほど候補を決めた所で、店内をうろろしているみほへと声を掛けた。

「どう、みほさん的にはなんかお気に入りなの奴とかあったの？」

「これとか良いかなあとは思ったけど、ちよつと高いからまた今度にしようかなって」

見てみれば、ペアリング型のネックレスだ。男女どちらが付けても問題無いデザインとなっており、シンプルだが輝いているステンレスのリングと、洋風の彫刻が入ったりリングが組み合っており、悪くない。値段も9000円程と確かに、学生が買うにはややお高い。

「ちよつとお会計してくるから、外で待ってるか、さっきの所に行っても良いよ」

「わかりました」

とととつ、と小動物の様な足音が響きそうなくらいに気軽な足取りで去っていくみほを見て思わず笑いそうになる。だが、あれくらい明るくなれば、彼女の不安の種も無くなるだろうと思えた。

クルトが気になっていたのはプレートタイプのネックレスで、ややくびれがある形にロジウムメッキがコーティングされて色気のある艶が出ていた。15000円程だが買えない品でもないので思い切って購入する事となった。

袋を『二つ』持って出たクルトは、店の外で待っていたみほと合流。

「ああ、そういえばこれ忘れ物」

「へ？」

持っていた袋を一つ渡し、そのまま先ほど三人が入って行った洋服店へと向かう。一方のみほは歩きながら、袋を開けてみれば何やら小さな箱の一つ。まさか、とは思って開けてみれば、その予感は的中していた。彼女が選んだネックレス、実を言えばそれなりに気に入っており、しかし値段が値段だけに手が出せなかった。ケース入りで限定品なのも後を引いたが、別の機会に似た物を選べば良いかと諦めていたものだ。

「あ、あの！これ!!」

「ああ、気にしないで。少し前にもエリカに贈り物したし、みほさんに

はこれからも頑張って貰わないといけないからさ。エリカの事も宜しくお願いしますって事で」

「……ありがとうございます。その、これ、付けて貰っていいですか？」

「ん？ 良いよ、ちよつと待ってね」

みほからアクセサリーを受け取り、後ろの髪を上げて貰ってネックレスを通す。ふわりと漂う女性特有の甘い香りが鼻をくすぐるのだが、やはりエリカで耐性があるのか何ともない。爆発しろと言いたくなる光景に、奴一人だけ限定で爆破させられる小型爆弾は無いのか、と言いたくなる状況。

「はい、オツケーだよ」

「大事にしますね」

「まあ、粗雑にはしないでしょうね。普通だけど」

「あはは」

仲睦まじい様子に、周囲からほっこりとする視線を受けつつ三人の所へと到着した二人。当然ではあるが、エリカと雛芥子から物言いたげな視線を受けつつも、そしらぬフリを決め込むクルトであった。

ぶんすこ事情なエリカさん

逸見エリカはやきもきしていた。何故なら、最近クルトと、西住姉妹の仲が妙に良く感じるからである。以前買い物に出かけた時も、何故かみほにアクセサリーをプレゼントしていたし、最近では昼に彼女を呼んで一緒に食べる事も基本となっている。

「ぐきぎき」

今もまた、その二人と何か会話をしているクルトを見て奇妙な声を上げるエリカに対し、直下と雛芥子は何事かと困惑と呆れを交えながら口を開いた。

「どしたのエリカ」

「別に、何でもないわよ」

「たぶん愛しの西住まほ隊長がミハエルに盗られるって嫉妬してるんじゃない？ もしくは逆か」

「違うってば!!」

自分でもよくわからないから余計にイライラする。クルトがまほに話し掛けるのもイラつとするし、その逆もそうだ。みほに話し掛ける事は余計にイライラする。目の前でイチャつきやがって、とどこぞの報われない独身男性もかくやと言わんばかりだ。

そんなエリカはさておいて一方、クルトはまほとみほの両名に、現状の車両整備状況について報告していた。

「取り敢えず、パンター全車はチューンアップ完了してます。具体的に見積もったのはエンジン出力を上げる事で移動性能の上昇、これによって以前よりも運動性能が増したのでより迅速に位置状況の対応が素早くなると思います。その他にもサスペンションの改良で主砲精度の上昇、二砲を主砲を8, 8 cm Kw. K. 43 L / 71, その他のパンターを7, 5 cm Kw. K. L / 100に変えた事での攻撃力の上昇といったところですよ」

「ふむ。この二車は加速性能は上がった分の最高速度がやや落ちた形になるか」

「はい。マイバッハエンジンを丸つと変えたので。とは言え瞬間的な

行動力は増加したので、瞬時な位置変換の際は静止射撃状態からより素早く動く事での状況制圧もしやすくなるかと思われます」

「個性を生み出す事で意図的な凹凸を作る訳か。成程、他のは？」

「まず、Ⅲ号戦車ですが、初期型でしたので全部改造キットで変えて後期であるJ型に換装完了してます。偵察車両という事で主砲は7, 5 cm Kw. K. 37 L/24に変えて、撃破ではなく履帯や転輪の足回りにダメージを与えて素早く逃げる事を意識したやや口径が大きめの方に変えました」

「成程、それは実に助かる。通常であれば攻撃力は足りるが、強豪校となると装甲厚が高い戦車も増えて来るからな。緊急時による相手フレッジ車への強襲を考えても、良い判断だと思う」

「ありがとうございます。西住姉妹両名のティーガーも砲塔と主砲を全部変えて、8, 8 cm Kw. K. 43 L/71砲にしています。以前よりも砲性能が格段に上がっていると思うので、此方を確認ください」

持っていた小型ボードから紙を剥がし、まほとみほへと手渡す。視線を上下に動かし、以前の主砲との違いがしっかりと数値で現れていて見やすい。

「これは良い調整だ。以前の7. 5 cm砲よりもDPMは下がるがそれ以外は圧倒的な上方修正だな、何処でこんなモノを見つけて来たんだ？」

「カリウスさんの知り合いがドイツに居たそうなので伝手を使ったらしいです」

「そうか。今度ビールを御馳走しなければいけないな」

「未成年なので買う時は先生にお願いしてくださいね。スキャンダルなんて笑えませんよ」

「気を付けるさ」

小さく笑うまほの次に、みほへも先ほどと同様の説明を加える。全体的な操作感は以前よりも動かしやすく、主砲が変わったので一応は感触を確かめて置いてくれ、と言え、何故か砲を撫でて、硬いです！ と言い張る。そうじゃないという気持ちがあったが、まほが、実

際に撃って確かめろという事だ、と言えば顔を赤くして押し黙った。「えーっと、続けますね。ヤークトパンターは改造案でヤークトパンターIIにしようか、とはなったんですが、改造キットがどうしても見つからなかったので現状はそのままという形になってます。履帯を少し変えたので走破性能は上がっていますが、運用自体は以前と同じと考えて頂ければ」

「ふむ」

「フェルディ……エレファントはなんとか砲塔と主砲のキットは見つかりましたが、エンジン部分は残念ながら。12, 8 cm Pak 44 L/55に変えた事で、こちらもだいぶ攻撃性能は増したかと思えます。ただ、その分エンジン出力がやや足りなくなってしまうので、移動や射撃の際は少しだけ注意するように」

「エレファントはある程度動かしてエンジンを変えるまで癖を把握するしかない、か。分かった。他は」

「ヤークトティーガーはドイツ本国でも人気車両なのでキットはすぐ手に入りました。こっちはほぼほぼフルチューンアップですね。見て下さいよこれ」

「これは、素晴らしいな」

手渡された書類を見て、まほは思わず声を上げる。攻撃部分では要と言えるヤークトティーガーだが、主砲、精度、移動性能全てが上がっている。ネットクだった移動速度が改善された事で、より状況に変化させやすく、自慢の装甲を活かした戦術の幅が広がるのは間違いない。

「主砲は12, 8 cm Pak L/66に変えたので、当たればほぼ撃破判定まで持っていけるレベルになっています。マイバツハエンジンもHL 230に変えたので車体重量は増えましたが、その分はサスペンションの改良と履帯を変えた事で問題点はクリアしています。今の所はこいつが一番改造に苦労しましたね、でもその分の性能はきっちり数値に現れているかと」

「ああ、実に助かる。後は実際に試験運用して具合を助かめるばかりだ。演習で性能を確かめるのが楽しみになって来たよ。今度君にも

礼をする」

「いえいえ、それじゃ、自分達は廃棄パーツバラしてくるんで」

陸軍式敬礼を返し、向かった先は車庫の隅にあるスクラップ置き場。大きなものは基本的に業者に引き渡しているもので、細かい部品でまだ使えそうな部分とそうでない物に分ける必要があるのだ。というのも、例えば継続高校の様に、スクラップパーツを集めて一つの戦車を組み立てる様な、強かな学校がいるからだ。

判別した後は一応は資金源にもなるので、校内HPにて、スクラップパーツの張り出しがされ、欲しい学園に格安で送るという訳だ。因みにだが、一番高いのはエンジンである。というのも、メインタンクさえあれば細かいパーツは安く手に入るので当然だ。

「ちよつとアンター！」

「お、どうしたエリカ」

きこきことボルトを外して排熱パイプを取り外している中、鼻息荒くエリカが攻めてくる。妙にいきり立っているエリカに対し、当然だがクルトは涼し気な表情で作業を続けていた。

「さつき隊長と何を話してたの」

「ん〜？ 全車の整備部分についてかな。何処がどう変わったのかって言うのは伝えないとダメだからね〜」

「あつそ。それ以外は」

「え、特にないけど。どしたの」

本来であれば、何事も無く流すつもりだった。エリカがつんつんしているのはいつもの事であり、これまで何回も見て来た光景だ。だからまたいつものだろうと思っただが、微妙に雰囲気が違う。なんとも説明しがたいが、しかし違うというのだけは確信出来る。それが何なのか分からないのが困った点である。

「別に」

「別について」

エリカ様か、と言いたくなつて、エリカか、とよくわからないオチが付いた。

「普段よりそんなつんつんして、何か嫌な事でもあったの？」

「別に何も無いけど」

「それは困った」

聞いても分からないので諦める事にした。意識をエリカから目の前の作業へと戻し、再び仕分け作業を再開する。大きな砲塔やエンジン部分などは外で他の三名が作業をしており、クルトは簡単な方を任されていた。

このジャンク置き場にある物は、ほぼほぼ使われない品ばかりなので、最低限鉄とそれ以外で分ける程度で終わりだ。それ自体も既にある程度終わっているの、後は目についた数個のパーツのパイプや配管を取り除いて終了である。

背後から聞こえるマイバツハエンジンの音をBGMに作業を続けていると、その中にノイズの様子が混じる。見てみれば、かつかつとコンクリートの地面を靴で鳴らしているエリカの姿。動作から見ても苛立っているのは一目瞭然で、話し掛けたら爆発するのは目に見えているので誰も近寄ろうとしない。疑問なのは、何故、クルトの背後にいるかである。

「……………どしたの」

「何でもないわよー」

「エリカ、言いたくないけど今ものすごくめんどくさい状態だぞ。俺が何かしら原因で怒らせたなら謝るし、何でそんなに苛々してるのかはわからないけど、八つ当たりされるのは嫌だぞ」

「…………仕方ないじゃない。なんでこんなにイライラしてるのか自分でもわかんないんだから」

「うーむ。取り敢えず作業もうちよつとで終わるし、どうする？ 一緒に帰る？」

「帰る」

「はいはい。それじゃちよつと待っててくれ」

何故イライラするのか分からない、という疑問を吐き出せて幾分か楽になったのか、やや落ち着きを見せたエリカはその場にあったコンクリートブロックを椅子代わりに、クルトの作業が終わるまで待つ。時折、エンジンオイルの強い臭いが漂って思わず離れそうになるもの

の、目の前に座るクルトはそれに動じず黙々と作業を続けている。最後の一つのパイプを仕分け、更衣室前で分かれた二人は、シャワーで汗を流し、校門前で合流する。

「それで、何でさつきはあんなにイライラしてたの？ そうなった切っ掛けというか、瞬間は覚えない？」

「……アンタが隊長と話してたのを見てた時から」
「成程」

これで納得がいった。エリカはまほの事が大好きである、恐らく、書類を交えてのミーティングであり、エンジン音が響く車庫なのでお互いが少し近い距離だったのも猶更だったのだろう、と理解した。

「次からは西住隊長との距離感には気を付けるよ。大会前だし、俺の起こした事であんまり気にし過ぎてもダメだからさ、一気に熱が上がった時、すぐに冷静になれる心掛けの練習って事で今回は落ち着こう、ね？」

「そう……ね。私もちよつとらしくなかったかもしれない、ごめん」
「気にしないで。家に瓶入りのテイラミスとコーヒー牛乳あるけど、食べてく？」

「食べる」

「そっか。甘い物食べれば元気も出るし気分も良くなるよ」

その後は特に会話も無く、ぼんやりと二人でスイーツを食べる。少しだけ開けた窓から差し込む夕陽に混じり、ウミネコの声が響き渡る。クルトはこの静かな空間が好きだった。この世から一瞬だけ隔絶されたかのような静かな雰囲気心が落ち着かせる。

「アンタ、好きな人とかいるの？」

ふと、エリカが呟く。振り返れば、普段より少しだけ目付きが弱い。

「え、特にいないけど。どうしたの」

「いや、いい」

「なんだそれ」

即答で帰って来た時点で本当に居ないのだと即座に察して話を切り上げた。相手が居ない、それは嬉しい事でもあるが、同時になんだか悔しくも感じる。

「帰る」

「あいよ」

大会前で少しナイーブになり過ぎている、自分にそう言い聞かせ、これ以上は長居しない方が良さそうだと判断して立ち上がる。もう一週間もすれば対戦校を決める抽選会が始まる、その前に気持ちの整理をしなければならぬ。そうしなければ、その後にはやってくるプレッシャーに耐える余裕がなくなってしまうからだ。

高校の戦車道は中学校までの戦車道とはレベルが違う。此処で出した成績が、はつきりとこれから先の進路に関わってくるのだ。自分が足を引つ張り、これまで築いた栄光の道を進んだ、敬愛し尊敬するまほの為にも絶対に負けられない。そう考えれば考える程、気持ち沈んで余裕がなくなる。

だからなのだろうか、クルトとまほが話していて、苛立った理由が分からない。自分はクルトに嫉妬していると思っ込んでいる。そうでなければおかしいはずだ、と。だが、その自問にはつきりと答えられない自分がたまらなく嫌になる。相手の好意に気付いておきながら、もしもを考えて臆病になり、結果恋は冷めて行った。冷めた恋は固まって家族へ向ける親愛になった。

そのはずなのに、みほが付いていたネックレスを見ると、まほと話すクルトを見たときは比べ物にならない程の苛立ちを感じるのほどうしてだろう。

「……………疲れてるわね、私」

これではダメだと判断したエリカは一人、以前も行ったスーパー銭湯へと足を運んだ。大会前のリフレッシュにはちょうどいいだろう、と。相変わらず賑わっているスーパー銭湯で、体を洗いジャグジーバスへと体を沈める。これで周囲に人が居なければ静かで最高なのが、公共施設でそれは流石に無茶かと内心笑う。

静かに、お湯に体を揉まれていけば気分もそれなりに楽になる。恐らくは疲れが溜まったせいであんな嫉妬紛いな気持ちになつてしまったのだろうと気付いた。気付いて、おかしい、と感じた。先も整

理したが、エリカはクルトに恋愛感情を抱かれていたのを気付いておきながら、気付かないフリをして、今に至る。

その当時は正直に言えば両想いだったと思う。しかし、万が一、そうではなかったとしたら、という思春期特有の恋に対する不安が自分の足を掴み取り、一歩前に進む事が出来なくなってしまう。そうこうしているうちに、クルトの優しさに甘えすぎて、その結果は姉と弟、兄と妹の様な感覚で落ち着き繋がってしまった。だからこそ、確かにまほは憧れと尊敬を抱く相手だが、むしろ付き合いの長いクルトであれば、人柄も分かっているし知らない男とまほが結婚するよりならば、自分勝手ではあるが落しどころとして文句はない筈なのだ。

(ああ、ダメだ。深く考えたら戻れなくなる)

この思考は泥沼に嵌る。そう考えたエリカは無理やりに思考をシャットアウトした。落ち着いたからこそ、逆に一つの考えに集中すると止まらない。今は切り替え、戦術や効果的な運用を頭の中で考えて、何とか誤魔化し、さっぱりとした気持ちで帰路へ着く。

運命の幕開けは、既に背後へと迫っていた。

色々あったヴェイツトマン

住む地域で特性というのは変わる。同じ生物でも環境の違いが多様性を生むように、戦車道もまた各校の特色がある。例えば黒森峰、真正面からの面制圧で蹂躪するタイプ、サンダースの様に物量で押し切るタイプ、聖グロの様に一歩一歩しっかりと駒を進めて有力な展開を盤石なものにするタイプ、プラウダの様に縦深防御で敵を誘い込み包囲殲滅するタイプ、知波単の様に大和魂で突撃するタイプ、アンツイオの様にノリと勢いで突っ込んで流れを生むタイプ。

このように各校の特性を活かす戦術の根幹には、それを可能とする性能を持つ戦車を使うからこそだ。性能が良ければ当然、多少の不利益な状況も強引にねじ伏せることが可能。黒森峰はそういった形で、ランスの良いパンターが下地を作り、攻撃力のあるティーガー、ティーガーII、ヤークトパンター、ヤークトティーガー、エレフアント、マウスが粉碎していく。

今回の初戦の対戦相手は継続高校。艦の規模もそれなりに大きく、フィンランドをモチーフとしている為に森林等の自然が豊かな学園艦だ。何度か黒森峰と練習試合をしているが、森が多い学園艦の出身であるため、基本的にゲリラ戦法を得意としており、マニュアル戦法を得意とする黒森峰に対して上手く立ち回ることが可能な相手だ。

平地での戦闘では圧倒的に黒森峰側が有利だが、森に囲われた場所での戦闘は個人個人の持ち味を生かした戦法を得意としており、西住流とは対極に位置する島田流のようだとも言われていた。はつきり言ってしまうえば相性の悪い明確な学園であり、次の対戦場所も丘陵のある森林地帯となっている為、相手のテリトリーといっても過言ではない。

現在、クルトは港にて待機している学園艦から離れて、試合会場近くの街を歩いていた。エリカ達は既に雛芥子、直下と共に街へと遊びに出ており、二日後の試合へ向けての息抜きをしている最中だ。その為、珍しく一人となったので、誰の目も気にせず街を遊び歩いている

のである。

今回の服装はカジュアルスーツタイプで、上はカーキ色の背広に白黒のチェック模様シャツ、下も同じくカーキ色のズボンで揃えており、雰囲気としては大人っぽさが際立つ。今回この服装にしたのは、エリカからプレゼントされたからである。あまりに唐突だったが、ソレをもらったので直下や雛芥子がそれを見てみたいという連絡があり、どうせならと夕飯はいつもの面子で外で食べようという約束をした。それまでの時間つぶしにと外に出たのだった。

本来は特に用事もなかったが、気分転換目的で外に出れば、意外とやりたいことや目的が増え始める。

現在向かったのは紅茶の茶葉を売っている店。デザート作りも良くするので、コーヒー以外でも紅茶は良く飲む方だ。愛飲しているのはフォートナムメイソンのアツサムで、ミルクティーの相性は抜群である。それ以外にも挑戦してみようと思い、店の人に聞きながら選ばば間違いないと踏んだのである。

(これは間違えた奴かな)

店に入った瞬間、それを確信した。店内にいるのは殆ど女性、テーブル席もあって紅茶専用の喫茶店としても利用出来る店であった。しかし、問題はその客層である。一発で分かるその服装、というのも、聖グロの制服を着た生徒が多数居たのだ。女性が多いのもあまり得意ではないので後でまた来よう、そう考えていた時だった。

「あらっ？」

「ん？」

横からの声に振り向けば、そこに立っていたのは見覚えのある生徒の顔。

「偶然ですね、ダーズリンさん」

「……こんな格言をご存知？ 運命の中に偶然はない。人間はある運命に出会う以前に、自分がそれを作っているのだ」

「アメリカ大統領、ウッドロウ・ウイルソンですか」

「博識ね」

であるならば、彼女がいるのも当然と言えた。口に手を添えて小さ

く笑うダージリンは楽しそうに表情を輝かせている。一方で、その隣には見覚えのない生徒も居た。彼女と同じくブロンドヘアードだが、髪型はダージリンの様なギブソンタックではなく、前髪を後ろに、それを黒いリボンで止めておでこがキラリと輝くモノ。髪の長さもそれなりに、緩やかなウェーブがかかり背中の中まで届こうという具合。深い青みが混じった薄紫の皮の様な綺麗な瞳をクルトへ向けて、お前は誰だと言葉にしなくても悠々と語っていた。

「ダージリン、この方は？」

「そういえばアッサムはあの時は風邪で休んでいたわね。以前、我々の戦車を一斉整備したでしょう？ その時に招いた整備士の一人よ。黒森峰学園一年生、見入クルト、同じ黒森峰整備部での愛称は苗字の読み方を振 ったかの有名な戦車乗りのミハエル」

「ずいぶんと調べてますね」

「ええ、狙っていますから」

は？ と、呆れと疑問を浮かべながらアッサムは僅かにクルトを睨む。アッサムが睨んだのは何も怒りによるものではない。アッサムはクルトと初対面であり、加えて言うならばダージリンとは二年の付き合いがある。だがこれまでを思い返しても男の気配もなければ出会いも当然なく、そもそも聖グロは今は女子高なので出会いがないのは当たり前とも言えた。

だからこそ逆に、狙っているという、普通に聞けば好意的に感じるその台詞を聞いた時、いったいいつからの付き合いなのか、と勘繰ってしまふのだ。アッサムとて乙女だ、色恋沙汰に興味がないわけではない。加えて友人が気になってる相手ともなれば当然だ。

しかし当然ながらクルトもそんな事を言われる覚えはない。クルトは馬鹿ではないからこそ、その台詞を、ダージリンの発した台詞の本当の意味はともかく、一般的な解釈で言えば好意を持たれていると受け止める。だが彼女とのコンタクトは非常に短い時間で、むしろあんな出来事があったのならば嫌われていることの方が自然である。

故に、アッサムと同様、困惑気味の表情をダージリンへ向けていた。

「え、あの時の無礼打ちとかでヒットマンでも雇ったんですか？」

「ヒットマン？　貴方それだけの悪事をダーズリンに働いたの？」

とんでもない言葉にアツサムの睨みが強くなる。女の敵という意味でヤバイ奴なのではないか、とポケットの携帯電話へ手を忍ばせて非常事態に備えた。

「人によってどう捉えるか分からないんですけど、恐らく狙われる理由はあの時俺が……」

「ゴホン！　そうではなく、整備士としての腕を狙っている、という事よ」

流石に、あの時のトチ狂った誘惑方法はダメだと後で冷静になつてから考えたダーズリンは、淑女にあるまじきあの時の行動を秘匿するべく、訝しんでいるアツサムへ説明するための台詞に割り込んだ。

「違うんですか、てつきり俺はダーズリンさんの下……」

「その件はもう良いです。逆にこれ以上語るのであれば……ね？」

「……はい」

この時のダーズリンは、背後にかのウインストン・チャーチルを顕現せんばかりの威圧を放っていた。取り敢えず、あの事は秘密にした方が良いでしょうと判断して押し黙る。取り残されているのはアツサムで、何なんだこれはと顔を右往左往するしかない。

「という訳で、どうかしら？　我が校も共学の話が出ているのだけけれど、そのテストケースという事で転校手続きを試してみないかしら？」

「いやいやいや」

これが相手が男であれば、なんでやねんとツツコミを返す所である。ドーバー海峡の様に話の流れが素早く変わったことに疑問点しかない。

「まあ、そうでしょうね。それより、立ち話もいいけれど、向こうにテーブルがあるから、どうかしら？　ティータイムに付き合つて下さらない？　勿論殿方ですから、断りませんよね？」

「まあ、それぐらいなら」

結局のところ、落ち着いて話を聞かなければ意味がないとクルトは判断した。ダーズリンがアツサムを伴っている姿は普段通りだ。しかし隣に男を連れてるのは珍しいを通り越して異常事態である。

テーブルへと向かう三人に向けられる視線は多く、ほぼ聖グロの生徒で埋め尽くされているこの場で、アウエイなのはクルトのみ。

「……落ち着かない」

「当然でしょう。貴方がダーズリンとどういう関係なのか分からないけど、私も驚きだもの」

「あら、どういう意味かしら？ アッサム」

「殿方を連れて歩く、その行為が注目されるなんて当然分かっているんでしよう？ ダーズリンなら猶更の事よ」

「失礼ね。そんなに色恋沙汰から遠く見えるかしら」

「見えるわね。殿方と付き合うというよりも上手い事利用してそんなイメージだから。いざ会話してみたら殿方から離れていきそうなの」

「酷い言い草ね。そう思いませんか？ えっと、どちらでお呼びすれば？」

「え？ あ？ お好きな方でどうぞ」

「じゃあ、私もミハエルと呼ばせていただきますしよ。ミハエルさんも、酷いと思いませんか？」

「……そうですね」

「ふふん、どうやら彼も私と同じことを考えているみたいよ」

「あら、違うと言葉にしているけれど？」

「そうですね、とはダーズリンの言葉に賛同しての発言とは限らないもの。それに表情を見ればすぐに分かるわよ、遠慮して合わせてあげてるのよ」

「酷いですわ、こんなに純粋な乙女ですのに」

「フヘッ」

「今鼻で笑いましたね？ ミハエルさん」

「いや全然」

「笑いましたよね？」

「いや全然」

鋼の意志でハッキリと答えた。短いやり取りからミハエルがダーズリンに対して抱いたのは、水面下で暗躍する政治家、もしくは裏の

世界の組織の代表、といった感じだ。一つでも弱みを握られると、そこから傷口を抉じ開けて情報を抜き取り自分の有利な状況に動かしていく、故に主導権を握られると間違いなく面倒な事になると考え、ハッキリと誤魔化した。

「その話はどうでもいいから、何故ダージリンか彼を狙うのか、理由を聞きたいのよ」

これ以上の茶番は見ても無駄だと感じたのだろう。小さくため息を吐くアツサム。とはいえ事情を知っているのはダージリンのみ、会話のやり取りを聞いても、彼女が一方的に狙っている事しか情報を得られないのだ。

女という武器を使って彼の秘密を引き出すならともかく、そういった何か秘密があるわけではない。ではダージリンが彼に惚れたので落としたのか、という訳でもなかった。ならば変に間延びするよりも直球で尋ねた方が早いと判断した。

「あら、つれないのね。彼を狙う理由はただ単純に、チームに莫大な益を齎す素材になるからよ」

「素材？」

「あの整備を終えて以来、貴女の大好きなデータに基づいた結果、細かい部分ではあれど性能が上がっていたでしょう？」

「……確かに。クルセイダーもリミッターを外した後の持久力も良くなって故障も無い、チャールも超信地旋回がスムーズになった事での砲撃移行の具合も良くなっていましたね」

「マチルダも、若干攻撃不足だった主砲をそっくりそのまま3インチ砲に変わった事で、それだけでも大きな利益よ。もしそれを、一回一回陸地の工場に送ったり、新車を買う手間を掛けずに少ない資金で行えたら？」

「余剰分を新たな戦力に導入できる、という事ね」

「ええ。それに、我が校はOGが伝統を重視するせいでもっと力のある戦車を使えないという致命的な欠点があるでしょう？ ならば、戦車を購入せず、パーツのみを集めて整備士に組み立てさせたならどうなるかしら？」

「……………なるほど」

ダージリンが言いたいのはつまり、一個丸々戦車を購入するともなれば、これまでの伝統を重視したOGに気づかれて即座に購入を止めると抑え込まれ、顧問もその圧によってそもそもの購入が取り消されてしまう。

加えて、いかにお金持ちな聖グロといえど、戦車一台を気軽に用意出来るかといえば実際はそうではない。戦車はそもそもの残存数が限られており、イギリス本国で使われていない車両を輸入しているの、数の限界が来ると打ち止めになってしまう。新規パーツ製造から再度組み立てるラインも国内には数が殆ど無いので受注したとしても相当な時間が掛かる。故に、基本的に海外から輸入するのだが、そうなるも異常なまでの資金が掛かる。

黒森峰が強豪校の所以が此処であり、強力な戦車をしつかりと多く保有し、加えて海外とのコネクションも強いからこそ、パーツや戦車の安定した入手ルートを所持しているのだ。

そして、整備士の技術を高めるための一環として、さまざまな戦車に触れさせるという名目でパーツを買い、それを組み立てる事が出来るのならば、それは途轍もなく大きな力となるだろう。一台丸々購入するのにも馬鹿みたいに金は掛かるが、一台組み立てられるパーツ自体は存在しており、それを完成させる事が出来るのであればコストも安上がりで、戦力も増強出来る。

当然、組み立てラインが可能な場所や人員が必要になるが、その程度であれば聖グロの学園艦に幾らでも存在する。新規パーツを製造する工場はなくとも、簡易的な整備をするための施設は当然必須である。そして、出来上がった戦車が正しく動くか試験的運用させるという名目で、実戦で使い、成果を上げればOGだって何も言えないだろう。より勝利に近づける為には、下らない意地を続けても意味がないのだから。そして、ダージリンには革命を起こす意思がある。

「そうなるよ、我が校にもセンチュリオンを始めとした戦車が加わる事で、黒森峰に対抗することだって可能よ。悔しいけれど、我が校の戦車は真正面からぶつかっても、そもそもスペックが劣っていて戦術

を駆使しなければ勝ち目は無いわ。だというのに、どこぞの誰かさんが加わった事で整備が向かい風になった結果、強力な戦車がより強くなっているもの」

視線を向けられ、アツサム漸くダージリンの目的を理解した。そう考えると彼を求めるのも理解出来る。学園艦に在籍する整備士というのは少なく貴重だ、それが女性ともなれば特に数が限られてくるだろう。そして、聖グロに入学する生徒でその道を目指す生徒など、まづ皆無である。となれば、外から風を取り入れるしかない。そんな中、若くして整備士として確かな力を発揮している彼は是非とも取り入れたくなる。

聖グロははつきり言って、全国大会で実績はあるが、輝かしい栄光を手にした事はなかった。準決勝や決勝で止まり、優勝旗を持ち帰った事などそれこそずっと前の一回きり、そこから伝統が始まって今の戦車のラインナップで固定されている。

そんな場所に整備士を募集したところで、確実に重用され、結果が繋がる事で次へと斡旋する力が強い黒森峰の様な強豪校や、学園艦という不便な場所ではなく陸地に留まるのは当然の事である。

「俺はただ戦車が好きで整備してるだけなんだけどねー」

一方で、評価してくれるのは嬉しいが、その数値が高すぎるとクルトは思う。若い芽を育成すればいいじゃないかとも考えるが、状況は深刻であり、整備士をより欲する側の気持ちは理解出来なかった。

「貴方の様な方が来て、実際に整備した戦車を使われて、それで優勝し、雑誌等に載ればそれこそ、後に続こうという人も増えます。けど普通はそこまで気を配る事なんて無いわ」

「でも、私達なら貴方の活躍をしっかりと表に出して後釜を育てる用意もありますし、その気があるのであれば、次の総隊長は私ですから、本気で掛け合ってそれなりの見返りは用意致しますわよ?」

「……そっかー。でもごめん、嬉しい誘いだけど今年中は間違いなく無理かなー」

「それはどうしてかしら?」

「まだ成果出てないからね。大会で整備した戦車が例年と比べての成

續の違いが出たってなるのであれば、短期留学とかも考えるし、俺だってスキルアップのチャンスは掴みたいからね。それに今は見守りたい人もいるから、気持ちに踏ん切り付けないと答えにくいねー」
「……そう。でも、可能性が無いというだけで十分です………こちらを」

ダージリンは懐からメモ用紙を取り出し、何かを書いてクルトへ手渡す。

「私の電話番号とメールアドレスよ。可能性があるのなら、私は今日から既に動いて、貴方がいつでも我が校へ来られる様に準備をしておきます、最低でも一か月は時間を戴くけれど、それ以降であればいつでもどうぞ」

「ありがとうございます、一応は受け取っておきますね」

電話を1コールだけ鳴らし、次にメールを送ることで交換は完了した。クルトとしても、選択肢が広い事は良い事だと考えている。黒森峰には幼馴染のエリカもいるし、仲の良い友人もいる。だが、自分が成長するステージがあるならばそこに貪欲に噛み付いていくのもまた、黒森峰の生徒らしい考えと言えるだろう。

「ただ一応念のために言いますが、自分はダージリンさんが評価するほど大した人間でもないですし、あの時一緒に居た三人に声を掛けた方が良いと思いますよ。俺はまだまだ素人ですからね、求めている事が現実になるという考えは捨てて置いた方が良いと思います」

とはいえ、クルトはダージリンに、これだけは伝えておきたかった。自分自身、やってみたいという気持ちもあるし、自分で出来ない事にはイエスと言わない芯だけは強く持っている。とはいえ、相手が望んだ成果と、自分が発揮出来る成果が同じ方向性を向くかどうかは確実ではない。

故に、下手に期待されて想定外だと抗議されるのも嫌だしそれこそお門違いで、そういった衝突は自分自身のやる気の炎を消してしまうのを強く理解している。

「でも、私はやれる方だと確信していますわ。自己評価の低い方にも二種類います、仕事は出来るけれどそれに慣れて大した事をしていな

いと思う人、本当に大した事が出来ない人。自己評価が低いというのはつまり、内心では自信がないだけです。けれど貴方の場合はどちらかといえば、自分は未熟だと考えているように感じました。

であるならば、貴方は未熟なりにステップを踏んで、確実に仕事を熟すこと意識し、次へと成長していく意欲がある。そういう人間でなければそもそも、あの整備士の三名も貴方に一人で仕事を任せる事なんてしないはずです。だからこう考えてくださいな、自分でラインを見極めるのではなく、他者からの評価もまた貴方の実績なのだ」と

だが、ダーズリンはそれも踏まえた上で受け入れると強く言い放った。まっすぐと向き合い、彼の实力を見込んでの本気のスカウトだった。

「難しいですね、意識の差って」

「主観で見ると客観から見るとは違いが出るのと同じです。貴方自身が思うほど、周りは低く見ていないという事です」

「そんなもんですか………難しい話はこれぐらいにして、紅茶の相談してもいいですか？」

「あら、別に良いわよ。どういった内容かしら」

「実はアツサムが好きなんですけれど、どれがいいかなあ、と」「んなっ?!」

此処でクルトはすっかり忘れていた事に気づく。目の前にいる彼女たちは、本名ではなく愛称として、茶葉の名前を冠している。これもまた聖グロの伝統であり、イギリスらしいと感じると同時に、いきなり好きだと言われて平然としない訳がない。聡明な彼女たちだ、茶葉の話をしていることなど即座に理解するに決まっている。

だとしても、異性から好きだと言われれば、よほど恋愛に慣れている相手でもなければ驚くのは当然だ。クルトも、目の前でクルトンが好きだと言われれば一瞬驚き、なんだクルトンかと冷静になる。それと同じ事だ。

「………ああ、すいません。茶葉の話です、紛らわしくて申し訳ない」

「……いえ、不意打ちで少し驚いただけだから大丈夫。それで、メー

カーの拘りなんかはあるの？ 名前を関しているだけあってアッサムについては詳しいわよ？ 実際に向こうに行って見てみる？ 気になったのなら注文して飲み比べれば良いし」

「なるほど、お願いします」

三人はテーブルから立ち上がり、茶葉が置かれた棚へと向かう。所せましと並ぶラインナップに世界の広さを垣間見ながら、アッサムが並んでいる場所へと向かった。そこには普段愛飲しているフオートナムメイソンの特徴的な優しいライトグリーンの缶も置いてあった。「そうねえ。日本人向けというのであればまずはこのリプトンは安定していると思うわよ」

「あ、コンビニでよく見る奴。ちゃんとしたブランドだったんだ」

置かれていたのは、学生から大人まで愛飲されているであろうリプトンという銘柄の茶葉だ。主にコンビニ等でミルクティーの紙パックを見る機会があるだろうが、ソレのブランドである。

「ええ。香りが豊かで味も良い、かと言ってコンビニで見るからと侮ってはダメよ。しっかりと確立したブランドだけあって評価されるべき味わいよ。むしろ、コンビニで売っている物と飲み比べればその差も分かりやすい物よ」

「成程。これは候補に入れておこう」

「あとはそうねえ……色々ある中でこれといえばエディアールもオススメしたいけれど、一番はこれかしら」

アッサムが手にしたのは高級感のある薄炭色の缶で、王冠が目を引くモノだった。

「ロイヤルコペンハーゲンのブレンドティーね」

「ブレンド？ アッサムじゃないんですか？」

「ダーズリンとアッサムがブレンドされているのよ。今日の出会いに良い品だと思わない？ 味も香りも格別に違う、間違いない高級品と確信出来るモノよ。その分少し値段は張ってしまうのがネックね」

値段を見れば、100gで二千円弱、とはいえ毎日飲むわけでもなければ十分な量といえるだろう。一回分の茶葉が3gほどと考えれば30回以上も飲めるのであれば十分だ。

「じゃあ、これにします」

「そう。お返事、期待してるわよ」

包んで貰ったソレを受け取り店を出る。その後も街を散策していれば、徐々に空は薄暗くなる。時計を見れば時間も丁度よく、エリカの電話番号を呼び出し鳴らす。3コールほどで、彼女の声が届いた。

『もしもし』

『エリカ今どの辺？ 時間も丁度いいしそろそろ夕飯時にいいかなって』

『今駅前よ、待ってるから』

『あいよー』

人の流れに沿って駅へと向かう。この時間帯は人も多く、帰宅中の社会人から遊びに出ている若者、数日後の戦車道大会を見る為に旅行に来たのかトランクケースを走らせる者と様々だ。至る所に大会の開催場所が大きく宣伝されており、それを指して大会の場所を探す者もいる。

そう遠くない駅前へと到着すれば、三人の姿は即座に分かった。黒森峰の制服に身を包んでいたからだ。現在九連覇中で注目されている黒森峰の生徒であるという点で、やはり周囲の注目を集めている。道行く人の足は止まらないが、視線を向けては大会の事を噂していた。

「おいつす、お待たせー」

「おおー、ミハエル大人っぽいねー」

「軽く化粧とかヘアメイクしたら結構モテそうだねえ」

「男って化粧するの？」

「え、全然するよ？ とうるか芸能人って基本的にそうだよ？」

「また一つ賢くなってしまった」

雛芥子からの情報に、うんうんと頷くクルトを見て呆れ顔のエリカ。何をやっているんだといわんばかりにため息を吐いた。

「ほら、バカやってないでいくわよ。イタリアンの良さそうなお店見つけたから、隊長達も待たせてるし」

「隊長さん達もいるのか」

達、という言葉で恐らく姉妹で待っているのだろうと察する。基本的にあの姉妹二人で動く事が殆どだからだ。とはいえ、どちらかといえば、みほが気楽に居られるのはまほの隣ぐらいであり、一方のみほもみほが最初の一步を踏み出すまでが長い事を知っているからこそ居場所になっっているのだろう。

エリカの後を追って向かったイタリアンには案の定、姉妹二人が店の前で待っていた。

「どうも」

「やあ、見入。いい服装だな」

「ミハエルさん、こんばんは。似合ってますね」

「どうもこんばんは、ありがとうございます」

「それじゃあ、入ろうか」

堂々とした足取りで中に入れば、内装は清潔感もあつて高級そうな雰囲気があるが、人でそれなりに賑わっており、メニューを見てもさほど高いという訳でもない。店内に置かれたボードのおすすりメニューの中には当然値段が張る品もあるが、目玉メニューという事なのだろう。

テーブルに案内された一同は席に着くのだが、此処でまた一つ少しだけ問題が起きた。普段であれば、まほの隣にみほが座り、その隣にエリカ、といった感じになる。だがここにクルトがいるのであれば、まほの正面にエリカが座り、そしてクルトの隣もきちんとキープするのが無意識のうちに当然となっていた。

何も考えていない直下がエリカの隣に座った事で、まほの隣にみほが座り、すでに雛芥子は席についていたので必然的にみほの隣にクルトが置かれる形となった。この時点で一同は急に少しだけ重くなった、なんとも言えない雰囲気を感じ取った。当然、エリカ本人もそれに気づいていない。

「取り敢えずどれを注文しますか？ これだけ人数がいるから、それぞれ食べたい物を注文してシェアすればちょうど良さそうかと」

「そうだな……」

テーブルに置かれたメニューは二つ。となるとそれぞれ座った側

で見る事になる。真ん中に置かれたメニューを見る為に少しだけ体を寄せるのも必然で、クルトとみほの距離が近くなった瞬間、それを見たエリカは急に苛立ちを感じた。

「エリカ、どれにするー?」

「私はどれでもいいわよ。二人で勝手に決めて」

「ん? そう? ……どしたのエリカ」

「別に」

隣に座る直下は、何となく不機嫌になったエリカに気付いて声を掛けるが、エリカは膠も無く返すだけ。一方対面の三人はそれぞれ、どれにしようかと会話に花を咲かせている。普段あまりしゃべらないまほも、どういった物なのかとクルトに尋ね、内容を聞いて考えている様子だ。

「この、牛ひき肉のトマト煮のゼツポリーネってなんですか?」

「ゼツポリーネは生地を丸めて揚げたピザだね、たぶん中にトマト煮にしたひき肉を詰めてるんだと思う」

「へえ、じゃあじゃあ、これはなんですか?」

「ポルポツティアフォガードはタコをトマトソースで煮込んだ奴だね。ナポリの郷土料理だよ」

すらすらと答えていくのは、一人暮らしで料理のレパートリーを増やす為に調べて得た知識のおかげだろう。なんだろう、と思った品も答えていく様にみほは顔を輝かせ、一方のまほも頷きながらメニューを決めかねてしまっているようだ。

ある程度考えたが、ひとまずは基本的なメニューにしておこうと考え、パスタはペンネのアラビアータ、マルゲリータ、チーズリゾット、サルシツチャ、ハモンセラードのメロン巻き。そしてクルト個人が食べたくなったのでベジータのローストを注文する。

ドリンクは全員が未成年なのでソフトドリンクで、エリカ、雛芥子、直下はノンアルコールのサングリア、まほ、クルトはノンアルコールのリモンチェットソーダ、みほはクルトにオススメされたサンタルというメーカーが出している、アランチャロッサという、ブラッドオレンジジュースを選んだ。

それぞれが普段あまり口にしない品をチョイスしたおかげで会話も弾み、本来ならばエリカの気分も良くなる、筈だった。

「これ、美味しいです！ ミハエルさんが飲んでるのはなんでしたっけ？」

「これはリモンチエツロだね。レモンの皮を蒸留酒とかに漬け込むんだけど、これはノンアルコールだから少し甘さが強いレモネードって感じかな、飲みやすいしさっぱりするからオススメだよ、飲んでみると良いかも」

「それじゃあ、いただきます！」

「え」

何も考えず、みほはグラスを受け取り、口を付けてない部分から一口飲んだ。口の中にレモンの酸味が広がるが、しかしあまり強さはなく、ほんのりとした甘みの中に僅かな苦みがあって、具合が悪い時に良さそうだ、という感想を抱く。

「……あの、俺飲んでただけけど」

「……ああ！ ごめんなさいごめんなさい！」

そして、みほも気付く。目の前にいるのは女ではなく男、同性ではなく異性だ。つい勢いのままやってしまったが、普通であれば彼の発言は、新しく注文して飲んでみろという意図だ。顔を赤くしているみほに対し、クルトも思わず顔が赤くなる。彼女はエリカと違って知り合って間もない。そんな相手にこんなことをされては流石に恥ずかしく感じる。すると。

「ちよつと！ 流石にそれはダメでしょ！ アンタも女なんだから気を付けなさい！」

途轍もなく不機嫌になったエリカからの発言に、顔を赤くしたまま俯くみほ。エリカの発言は注意ではあるが、しかしハッキリとした怒りが混じっているのは周囲から見れば明らかだ。

「まあまあ、みほさんは少し抜けてる所あるから、許してあげなよ。俺は気にしないから」

「そういう訳じゃないでしょ！ 仲が良いからなんて言ったらそのうち、汗掻いたからシャワー行きましようとか無意識に同性相手に言

うような事も言い始めるわよ!？」

「そういや実際に言ってたね、すぐ気付いて顔真っ赤にしてわたわたしてたけど」

直下からの爆弾発言に場が固まった。お前まさか、という視線がクルトに向けられるが、勢いよく首を振って否定する。

「はあ……みほ、流石に気を付けろ。見入がお前に優しいからと友達の様に甘えるのはいいが、過ぎた行動は恥知らずになる。みほは少しうっかり屋だから、気を付けないとだめだ」

「うん……ごめんお姉ちゃん」

「悪気が無いのも分かるし、それだけ見入を友達と思う事は良い事だ、だが線をきちんと見分けなければ相手を不愉快な気持ちにさせる、気を付けて」

「うう……」

普通に考えればあり得ない事だろう。だが、みほはこれまで友達と真つ当な会話をした事は少なく、こうして外に出かけて皆と食事をするといいだけでもただただ嬉しかった。加えてみほの年頃ともなればこうした一つの事が新鮮で、故にらしくもなく、気分が舞い上がってしまった。いた。

年頃の男子との会話も無ければむしろ同性との会話も少ない。そんな中、一年生で副隊長をしているというみほに対して、分け隔てなく接してくれる皆がいて、おまけにクルトはどこか兄の様に感じられた。些細な相談にも乗ってくれる、否定から入らずじっくり話を聞いてくれて、おまけに中学生の頃から実はエリカを通じて密かに知っていた。極めつけは、応援という事で送られたアクセサリー。

だからこそ、彼女にとつては最早身内同然であり、もし彼が困っていたら本気でそれを解決するために努力する気概すらある。

みほの意識からすれば、クルトは姉に近いようでそうではない、昔からお世話になってる人といった感覚。とはいえ、仲が良い相手にはとことん懐いてしまうみほだからこそ起きてしまった事故だろう。

「まあまあ、それぐらいにしておきませんか？ 隊長、みほさんはほら、ちよつと天然だから……」

「まあ、そうだな。見入もすまなかつた、悪気がある訳じゃないんだ」
「別に気にしてませんって、そんな大事だと思ってますし、たかだか飲み物飲まれたぐらいですから、ね？」

「ふうむ、普通は年頃の男性であれば気にするのではないか？ 人によつては嫌がると思うのだが」

「エリカで慣れたから特には。それにみほさんだったら別について感じですね、嫌っている相手でもないの」

「ふむ、そうか。これからもみほを宜しく頼む」

「おや？ と一同は思う。その台詞はちよつと変な方向を向いてないか、と。」

「仲のいい友人としてなら、当然です」

だがクルトが正しいルートに戻した事で安心した。もしそうでなければ隣のエリカが今にも爆発しかねない状態だったからだ。

ひとまず料理が運ばれてきたことで雰囲気はいくらか柔らかくなった。料理自体に罪は無く、味も良くて腹が満たされれば気持ちも落ち着いたのだろう。先ほどの少しだけ尖った雰囲気はなくなり、皆に笑顔が戻る。

あらかた料理が運ばれ、最後に来たのはクルトが頼んだベジヨータの香草ロースト。ふんわりと香りが広がり、肉厚な身が非常に食欲をそそる。表面はカリッと焼き上がり、中は柔らかくじんわりと肉汁が流れている。それをナイフで切り分けた後、小皿に乗せてエリカへと渡した。

「はい、エリカも食べるでしょ？ ベジヨータ」

「ん、ありがと。ベジヨータって何？」

「イベリコ豚のランクみたいなのって思えばいいよ。普通のイベリコ豚と育成方法を変えてるから、海外のオージービーフの赤身と国産の高い和牛の赤身との違いって考えるとわかりやすいかも」

「成程ね……………！ お、美味しい」

「もう一切れ食べる？」

「いいの？ ありがと」

もう一切れ渡したとき、雛芥子と直下の二人と視線が合った。それ

を見て、四等分に切り分けた後に、残る四名にもきちんと分けた。クルトの元に残ったのは、他よりもやや脂身が多めな部分でお世辞にも良い場所とは言えない。それでも、美味しそうに食べる姿を見て、表情をほころばせていた。その時だ。

「あの、見入さん、良いんですか？」

「ん？」

「だって、残った場所って……」

「気にしなくていいよー。ほかの人がおいしそうに食べてるの見てるだけで十分だし、それに……ん、美味しい」

本来であれば彼が会計は別のつもりで頼んだ品で、安いかといえばそうではない。ほかの料理と比べても、単品で六千円ほどする。その分量は多く、三百グラムあるのでポリューミーだが、こうして分けるとしまえば結局残った量は少ない。最初に、高いから会計は分けると言って頼んだ品を、満足に食べる事もなく、余った場所を食べる姿がみほには気になった様子だ。

「……本当に良いんですか？」

「ソイツが良いって言うてるから良いのよ。あまり何回も言ってるのに逆に嫌われるわよ」

そんな時、エリカから声が届く。付き合いが長いからこそ、彼は気にしていないというのをエリカは分かっている。だが、その一言はみほにとって看過出来なかったものだった。

「……でも、エリカさんは二切れ食べました」

「……何よ」

ほんの僅かに火花が飛び散ったテーブルで、またもや雰囲気が悪くなりかけた。

エリカからすれば、分けてもらったぶんは幾らか出そうと最初から考えていた。値段も値段で、人を優先する彼の事だ、微妙な部分を自分に分配するに決まっていると最初から理解していたからこそ、最低限食べた分は出すと頭の中で決めていたのだ。

しかしそれを知らないみほからすれば、他人が負担する料理の美味しい部分を貰っていながら、自分だけ良い思いをしてその台詞はあま

りにも自分勝手過ぎるのでは、と思ったのだ。

「見入さんが食べた部分、脂身が多くてお肉も少なかったです。見入さんは優しいですから、エリカさんに渡した時点で他の人にも渡すと思います。なのに、その言い方は酷いんじゃないですか？ 少なくともエリカさんが二切れ目を催促せずに断れば美味しい部分を食べられたと思います」

「何が酷いのよ。そいつは頼んだ時点で皆と分けるつもりで頼んだにきまつてるじゃない。本当に食べたかったら二切れ目は残った脂身の多い場所を渡すわよ。そうじゃないなら、ソイツはそれで充分満足したってことよ、付き合いの浅いアンタがどうこういう事じゃないわ」

徐々にヒートアップする様相に雛芥子と直下はおろおろと首を右往左往するばかりだ。そろそろ止めるべきだ、と口を開きかけたまほより先に、ナイフとフォークを置いたクルトが静かに口を開いた。

「あのさ、二人ともいい加減にしようよ」

普段聞いたことも無いような、圧のある言葉に場は静まり、クルトへと視線が集まった。普段はにこにことして穏やかな表情を浮かべるクルトはおらず、明らかに怒っていると云った雰囲気爆発寸前であった。

「まずエリカ、言い方が悪い。付き合いも長いし、食べたからにはその分ちゃんと後でお金出そうって思ったんでしょ？ まあ思わなくてもいいけど、実際は出すつもりでしょ、そういう所はちゃんとしてるからさ」

「ええ、まあ……」

「だったらまず最初にそれをみほさんに言わないと、ただただ自分勝手な奴って思われて怒っても当然じゃんか。それにさつきからいきなり不機嫌になったりして、感じ悪いし折角美味しくご飯食べてるのに台無しだって、分かってんの？」

「だって……」

「だってじゃなくてさ、分かってんの？ って聞いてるんだけど、その所はどう答える訳？ 隣で不機嫌な人が居て雛芥子さんも直下さ

んも満足に楽しめる訳ないでしょ、怒るんだったら他の四人に迷惑にならないところで俺に向かつて八つ当たりでもすればいいでしょ、ハッキリ言っただけでかなり不愉快だからそういう事するなら俺、他の人と一緒の時は二度とエリカと飯食に行かないし出掛けたくない」

「……ごめんなさい」

「謝るのは俺じゃないでしょ」

普段は強気なエリカが、今にも泣きそうなほどに表情を歪めて、しつかりと頭を下げた。

「……………隊長、副隊長、直下、雛芥子、気分悪くさせてごめんなさい」という訳で、エリカを許してあげてくれないかな？ 原因は分からないけど、多分俺が悪いと思うし、俺も自分なりに考えて気を付けるから。ごめんなさい」

「ちよちよちよ、二人ともそんな謝らなくていいから！」

「そ、そうだよ。もう気にしてないから、ね？」

泣き出しそうなエリカを見て慌てた直下と雛芥子は取り繕い、気にしてないと愛想笑いを浮かべて何とか場を誤魔化そうと考えた。

「ん、ありがと。みほさんも、気にしてくれたのは嬉しいけど、俺も分かってやってる事だし、嫌な事は嫌っていうから深く気にしなくていいよ。エリカの言い方は悪かったけど、付き合っても長いしどう考えてるかはお互いにある程度分かってるから、ね？ 口調が強くてエリカに怒ったかもしれないけど、許してくれないかな？」

エリカの言い訳を一切許さない口調だが、こうでもしないと彼女が素直になれないのを分かっているからこそだ。一個一個丁寧に、何が悪かったのかを告げないと彼女は観念しない。退かずに食い下がる芯の強さも彼女の美点だが、今回はそれが裏目に出ってしまった。

「……………私もムキになってごめんなさい、見入さん、逸見さん」

「よし、これで終わり。料理冷めちゃうからまだあったかい内に食べちゃおう？ あ、何か飲み物頼む？」

「えっ、あつ、ウチ、リモンチエツ口ってやつ飲んでみたい！」

「あ、私もそれ」

流れを変える為の機転だと気づいた直下と雛芥子によって雰囲気

は落ち着いた。エリカとみほは未だに気にして引き摺っている様子だが、それを言及すればまた悪い流れになるのは目に見えていた。

その後は特に衝突することもなく食事を終え、会計に向かう。メニューを頼んだ時点である程度の金額は目星がついていたので、纏めてまほへと手渡す。クルトも自分が頼んだベジヨータの分を出そうとして、レジの前でまほに止められた。

「見入、今日の分は大丈夫だ、私が出す」

「え、なんでです?」

「普段は整備で世話になっっているからな、これぐらいしかできない。それにきつきはみほと、私の部隊のエリカが失礼をしたからな、その分の詫びもある」

「別に良いですよ、そんなことしなくても」

「こうでもしないと私も収まりが付かないんだ、私を立てると思って、頼む」

「……むう、そう言われたら何も言えないですよ。今日は御馳走になります」

「ああ。私はみほのケアをするから、エリカを頼んだ。それと、みほと仲良くしてくれるのは私としても嬉しい、学園では寂しそうにしていたから。でも、エリカの事もちゃんと見てやってくれ、たぶんアイツは……いや、これを言うのは野暮か」

「はあ」

「とにかく、エリカとは付き合いが長い分、見落としている所もあると思う。今日はその辺をきつちりと話し合った方がいいと思う」

まほに言われて、クルトは考える。そもそもどうしてエリカは急に不機嫌になったりしたのだろうか、と。思い返せばその機会は、大体まほやみほが居る時にもあったが、それ以前にも一度だけあった。そう、雛芥子と外出していた時だ。

あれは自分を仲間外れにしたから怒ったのだと考えたが、その時の怒り方と、つい最近の不機嫌になった時の態度が実に似ている。いくなれば、嫉妬に近いソレだ。

だがこれは半ば自惚れに近いと同時に、今更何を言うのかと考えて

しまうのだ。クルトの中で、エリカに対しての恋はすでに終わってしまった。だからこそ、今では彼女をサポートするために頑張っている。

そんな中、今更エリカに対して恋心を抱く事も無ければ、彼女もそんなことを思っているわけがないだろうと。だが、最近のエリカは何処かおかしいのは確かだ。まほやみほと話していれば急に不機嫌そうになったり、他の女子生徒と整備について話していると妙に威圧的にその生徒を追い払う素振りを見せる等々で、そこから感じるのは何とも言えない嫉妬心。付き合いが長いうえに、普段はツンツンしているエリカだからこそ、感情が混じった時の様子は逆に分かりやすい。

では何故嫉妬されるのだろうかと考え。特に顕著なのはまほとみほと話しているときで、考えうる限りその嫉妬の方向性には一応だが二つある。

一つは、まほを敬愛しているので、クルトと仲良く話している姿を見てクルトに嫉妬したという点。これはまほを尊敬しているからこそ、何を話しているのだろうかと気になったり、やきもきしてクルトへ嫉妬するという所、これは分かる。ではみほと話すときも同じような感情を向けられるのはなぜだろうかと考え、もう一つの部分に繋がる。

それは、クルトと話すまほやみほに嫉妬している可能性だ。もしそうだとすれば、まほだけでなくみほを交えた際の彼女の態度にも納得出来る。それに、最近ではみほに応援の意味を込めてアクセサリーを送った所、明らかに見せた怒りの感情。故に本日の服装はそれに対抗する形で送ってきたのだとすれば話は繋がるだろう。服を送った理由を尋ねた所、みほにアクセサリーを送ったから、というその時はよく分からない事を言っていた。

このことから判断すれば、エリカはクルトが女性と話すのを面白くないと感じている事になる。その理由は何故だろうと考えるのだ。家族として付き合いが長いからこそ、他人が仲良くしていることに嫉妬しているのか。もしくは、既に通り過ぎてしまった感情が、今になつて繋がってしまったているのか。

「どうした？ 見入」

「すいません、ちよつと考え事をしてました」

会計を終えたまほに促され、四人が待っている外へと向かう。頭の中で整理した結果、クルトが出した可能性は……。

【もしかしたら、エリカに男性として意識されているのかもしれない】

【付き合いの長い家族的な相手だからちよつかいを出されて不満になっただけだろう】

馴れ初めと出会いのお二人さん

すっかり気落ちしたエリカを伴って学園艦に戻り、向かった先はクルトの部屋だった。エリカは俯いたまま何も言わず、彼の後を着いてくるのみ。帰らないのかと尋ねても、首を横に振るだけだった。

家に着いた瞬間、エリカは玄関に座り込んでしまう。その場から動きたくないと思ってしまうが、此処にずっと居られてもどうしようもない。

「エリカ、取り敢えずこっちに行こ」

肩を控えめに叩けば、無言で差し出されたエリカの手。少し考え、一度躊躇し、そして優しく掴む。普段はあんなにも勝気で凛々しく見えるエリカの手は、歳相応の女の子らしく、柔らかく暖かかった。軽く手を引けば立ち上がり、ゆつくりと部屋へと到着する。ベッドに倒れこみ、枕を内側に抱えたエリカを見て、コーヒーでも淹れよう、と離れようとする。

しかし、クルトが離れた手を後ろから、手首を掴む姿を見て、そのままベッドへ腰かけた。

「……エリカさ、今日はなんであんなに怒ったの？」

エリカは何も答えない。ただ、握る手は少しだけ強くなる。

「俺が隊長さんや副隊長と話したり仲良くするのは嫌？」

少しだけ、小さく頷いて返す。

「俺がみほさんと仲良くしたり、応援のつもりで送ったアクセサリーも、嫌だった？」

握る力が強くなる。体は小さく震え、ゆつくりと、しかし確実に頷いた。何かを言おうと口を開閉させているが、踏ん切りがつかず、やがて口を真一文字に結んで再び静寂が訪れた。

「……そっか」

ふと、横を見ればエリカと視線があった。涙を一筋流し、普段の強気なエリカとは思えないほどに弱弱しく、儂げで、故にそれが普段以上に綺麗だと思ってしまった。

「分かった、気を付けるよ。でも、俺は別にみほさんと特別仲が良くな

りたいとかそういう訳でもないし、整備関連の会話はどうしても必要になるからさ、そこだけは分かって欲しいなって」

普段以上に弱気なエリカを見て、どうしてこうなってしまったのだろうかとかとクルトは考える。彼の知るエリカは常に気丈で気位が高く、心の芯が強い女性な筈だった。食事をしていた時も本当ならば、あの程度でこれほどまでに参ってしまうほどのダメージなど受けないはずなのだ。

もしクルトに勇気があれば、彼女に真意を尋ねたかった。だが聞けない。もし想定していた事と違っていれば、立ち直れそうも無いからだ。それならば、今の関係のままの方がずっとマシだと。だがそれでも、もしかして、と考えてしまうと止まらない。一度諦めた筈なのに、意識してしまうと頭から離れない。故に、ただただ、静かで重苦しい空気のまま、顔に手を添えて頭を悩ませるのであった。

エリカとクルトの出会いは小学生の頃だ。戦車道の名は広まっていたが、やはり国民の中では女性が戦車に乗るのはおかしいと考える人も居る。だがそれは乗るなという否定的な物ではなく、軍人が乗る物なので、なんで女性が乗るのだろうか、という疑問から来る意見であつた。だが、子供というのはそういった深さを考えず、それはおかしい、おかしいから変だ。変な事をしている、と無意識の言葉の暴力を生み出してしまう。

そんな言葉の暴力がエリカに向けられていた時が二人の出会いだった。

「なあ逸見、お前戦車乗ってるんだろ？　なんで戦車乗ってるんだよ」
「な、なんでって言われても……戦車道やってるから………」

「女が戦車乗るっておかしいぜ！　あれって軍人が乗るもんだろ？
じゃあ男が乗るのが普通じゃん！」

「こいつ普通じゃないんだよ！　戦車道とか名前もダサイし………
待てよ？　もしかして逸見って男なんじゃね？」

「確かに！　そもそも戦車道ってありえないよなー！　皆女装してる
男だったりしてな」

「じゃあ逸見も女装してるんじゃないか？　確かめてみようぜ！」

何気ない一言から、どんどん尖っていく言葉の暴力。それはやがて
物理的な暴力にすらなりえる。幼く道徳観が薄い子供ならば猶更だ。

「ちよつと、こつちこないで……やめてよ！　離して!!」

数人がかりでエリカに近寄り、腕を抑えつけたその時だった。

「あれ、みんなして何してんの？」

放課後、掃除当番を終えたクルトが教室にやって来た時、その光景
を見て彼は一瞬だけ瞳を吊り上げ、大きく息を吐いた時には既に普段
通り、柔和な笑みを浮かべた状態に戻る。幼さはあれど、同年代の生
徒よりも渋みのある顔立ちはそれだけでも威圧感があるので、自然と
笑みを浮かべる様になっていた。しかし、今の彼は無表情で、男子は
それに気付く事はない。

「お、クルト君！　逸見、戦車道やってるんだってよ」

「戦車道？　あゝ、なんか聞いたことある奴。それで？」

「戦車って男が乗るもんだから、もしかしたら戦車道やってるやつ
てみんな女装してるんじゃないかって話してたんだよ。今から確か
めてみようぜって」

「なるほど」

この時点でエリカは絶望した。小学生で人気者になる秘訣は、足が
速く運動が得意な生徒だ。勉強は二の次で、次に面白さが勝る。クル
トの場合、小学生ながら身長も高く、運動もそれなりに出来て顔も広
い。絶大な、というほどではないが、同学年の男子生徒に遊びに誘わ

れる人気者なのは間違いなかった。もし、彼が周囲にいる男子に同意したら、この先の展開は絶望的だ。とても嫌な事をされるのは間違いなかった。

「でも、別にいいんじゃない?」

「……え?」

クラスの男子から言葉が漏れた。その発言はどういう意味なのだろう、と。

「例えばさ、みんなってアイスクリーム好きだよな? 甘いものとか」

当然、と皆が頷く。夕飯よりも大好物とすら言えるスイーツは子供にとってお宝も同然だ。

「でも、そういうのって普通女子が食う物じゃない? じゃあ俺らつてもしかして男の恰好した女かもしれない」

「いやいやいや、それはないだろー」

「そうそう。ちゃんといってるしな!」

「こら、いきなりそういう事いうなばかやろー。逸見さんいるだろ」

唐突な下ネタだが、エリカはそれどころではなかった。しかし、雰囲気が変わり始めている事は理解した。

「じゃあさ、逸見さんが戦車道やってるからって女装してるって事にならないんじゃない? それに、好きでやってること、バカにしちゃだめだよ。俺たちがアイス食ってる時、そんなのおかしいお前ら女子じゃーんって、女子に言われるのすっげー嫌だしムカつかない?」

「……確かに」

「お前ら、そういう事逸見さんにしたんだよ? しかも、男子数人で女子の事いじめるって、すっげーかつこ悪いじゃん。それこそ男じゃないよ、そうじゃない?」

ばつが悪そうに頷く男子達は、エリカを抑えていた手を離れた。なんとも言えない空気が漂う中、クルトの柏手に皆が振り向く。

「それじゃあまず、逸見さんに謝ろう? そして俺たちのお小遣いで一人一回ずつ、逸見さんにアイス奢ってあげよう」

「えー!! そりゃないって!」

「うるせー! お前ら酷い事したって先生に言うぞ! いい加減に素

直に謝らないと俺も怒るぞ！ 具体的には毎日サッカーボール蹴つ飛ばしてぶつけてやる！」

「う、うめんなさい!!」

その言葉を聞いて、一斉に男子達が謝り始めた。人気者のクルトを怒らせれば、むしろイジメの対象となるのは彼らだ。加えて小学生にとつての最終兵器、先生に言いつけるぞ攻撃は防御手段など無く、素直に頭を下げる事でその場は解決した。

その後、戦車に興味を持ったクルトとエリカが仲良くなった事で、彼女を揶揄う生徒など出てくるわけもなく。加えて、徐々に若い世代、特に子供にも戦車道が広まり、その白熱した試合がマイナーチャンネルから全国チャンネルで放送されると人気爆発。元々親や姉が戦車道をやっていた家系のみならず、一般生徒の志望率も大幅に増えた。

戦車に乗ってみたいクルトではあったが、男子の戦車道など存在するわけもなく、しかし仲良くなった事でエリカから借りた戦車凶鑑を見てすっかりハマってしまったクルトは、エリカの乗る戦車を整備する、という約束の元勉強を始め、彼女と同じく黒森峰中学校へと入学。子供の頃の興味に対する熱中というのは強く、ひたすら小学校の頃から戦車について調べたクルトは、この時点で天職を見つけていたのだろう。近くの工場に入り浸って、若い世代が少ない職人達に孫の様に可愛がられ、実物に触れる事でより熱が爆発した。

「あの、逸見さん」

「ん？」

中学校二年の時だ。戦車道が存在する学校を選んだ為、必然的にそちらに入部したエリカ。一方で、黒森峰中学校が部活に入る事が義務付けられていた為、後を追う形で同じく入学したクルトだが、バドミントン部を選んでいた。戦車に関する部活が戦車道以外になく、なんとなくで入部して気に入ったからだ。

そんなある日、エリカに声を掛けてきたのは席が近いだけで友達でも何でもない生徒だ。

「どうかした？」

「逸見さんって、見入君と仲良いけど、付き合ってるの？」

「は、え？ 私が？ そ、そんなことないわよ！ 別に何でもないただの幼馴染ってだけ！」

「……そっかあ、良かった。実は、見入君に告白したいんだけど、手伝ってくれない?! お願い！」

その言葉を聞いた時、何故か強い衝撃を受けた。今までは一切意識していなかったこと、思春期であるが故に、誰にでも訪れる恋愛への、異性への興味。エリカからすれば付き合いが長いせいで考えても来なかったが、此処でふと考えてしまうのだ。もし、クルトが目の前の全く知らない女子の告白を受け入れてしまったら、と。

急激に体が寒くなり、冷や汗が湧き出した。どこことなく胃も痛く感じてしまう。

「ダメ？ あれだけ仲良くって付き合っていないって事は、別に好きってわけじゃないんだよね？」

違う、と言いかけて、どういう事だと自問する。なんで違うと言おうとしたのだろうか。別に好きだと思った事は一度もなかったはずだ、と。

(ああ……そういう事だったんだ)

逸見エリカは見入クルトの事が好きである。これは、気付かないフリをしていただけで、ずっとずっと想い続けていた気持ちだったのだ。目の前に現れた恋敵によって、それを理解させられた。でも、今更素直にそんなことが言えるほどエリカは器用な少女ではなかった。だからこそ、恥ずかしいという気持ちが強くなり、目の前の女子生徒に協力すると頷いてしまった。頷いて、家に帰ってただただ深く後悔し、不安になり、泣きそうになった。彼が離れて行ってしまったらどうしよう、と。

初恋の時はそれこそ、クラスの男子から助けて貰った時からだ。故に他の女子生徒の一時的な気持ちよりも遥かに強く、だからこそ悔しくて、不安になる。

今思えば、彼は中学校でも多少は女子から人気があった。ジャーマングレーの髪と、同年代の中では少し落ち着いて大人びた雰囲気。身長は町工場へ通っているせいかな食事も多くなり、中学生ながらに170cmに到達するなどその時点では大分大きい方になる。人当たりも良いし、運動も特に苦手な物はない。そして何より、顔立ちは平均よりも上であった。勿論彼よりも端正な顔の男子も多いが、そういった男子は既に彼女が出来ており、逆に何故売れ残っているのか、といった具合だ。

その理由は単純に、常に彼がエリカと居るので、恋人なのだろうと周囲が思い込んでいたのだ。だが、ある時クルトが、彼女はいないと言った事から広まり、彼を狙う女子はその為にもまず、エリカを排除するために、自らの告白を応援させるという方法に至った。

そして、クルトの好物、嫌いな物や嫌いな事をエリカから聞き、アプローチを続け、顔を合わせれば挨拶しあう仲へ至った時、その女子生徒はクルトに告白を試みた。

「ごめん。確かに仲は良いけど、今は彼女を作ろうって思えないんだ」それは、ハッキリ言ってしまったえばクルトの告白に近い物だった。彼の本心では、エリカの事が好きだったのだ。だからこそ、彼の発言は大事な言葉が抜けてしまった。それは、エリカ以外の女性と付き合うつもりはないという意志である。

しかし、それが抜けていた彼の発言はエリカすらも対象になってしまふ。例えば幼馴染のエリカですらも、恋人という枠に見られないという意味にとられてしまうのだ。

「ダメだった。見入君、今は彼女作る気ないんだって。残念だなあ」少しだけ泣きそうな顔をしながらも、その女子生徒は伝えなくていい事までもエリカに伝えてしまった。それは、クルトに一番近い彼女に対しての妬みもあった。その台詞を聞いた時、エリカは安心すると同時にショックを受けた。つまりは、エリカが意識したクルトへの思いはただただ一方通行だったのだ、と。

本来であれば両想いのソレは悲しい事にすれ違い、平行線を辿って

しまった。その後は、自分の思いを告げて断られ、この関係が失われる事を怖がるあまり、戦車道に熱中するエリカと、彼女の事が好きで、しかしエリカと同じくこの関係を壊したくないと思ったクルトの思いは平行線になり、結果的に今に至る。

もはや忘れてしまい、お互いが家族同然の付き合いとなったからこそ、恋愛の気持ちは冷めたとエリカは思っていた。思っていただけで、その炎は常に燻っていただけ。意識しようとしなかっただけであった。だが、その気持ちを思い出すきっかけは、あまりにも不意打ちだった。

街中で、戦車道の知り合いで友達だった雛芥子が、普段は見ない私服を着飾ってクルトと二人で居た。喫茶店で話し込む二人は楽しそうで、加えてクルトもエリカが見た事のない服——その時は新しく買った服なので当然だが——を着て、まんざらでもなさそうな雰囲気だった。

その瞬間、ただただ心がザワつき、今すぐ何かを殴りたくなるほどの怒りと嫉妬心が込み上げた。そこからだ、エリカがおかしくなったのは。

その後、買い物全員で行こうと提案したのは、これ以上二人きりにしたくなかったのと、彼と一緒に居たかったというのもある。だとこののに、洋服を見ている隙に、みほとクルトはいなくなり、戻ってくればみほの首には見慣れないアクセサリーと手に持ったショツプの袋。クルトの手にも同じロゴがプリントされた袋があり、猶更嫉妬の炎が燃え上がる。なぜ、よりによってお前なんだ、と。

中学生の頃、当初、エリカはみほの事が嫌いだった。頼りなさげで声も小さい、敬愛するまほの妹なのかと疑いたくなる。加えて、まるで依怙鼻肩の様に副隊長となった時は当然、渋々従ったが反感の気持ちは戦車道履修生の中では大勢が持っていた。

その後、エリカは考えを改めたが、その時のライバルが、今度はクルトまでもつていくのか、と考えた瞬間、頭が真っ赤に燃え上がりそ

うになる。対抗して洋服を送り、大会直前、外出し、食事をして、楽しんでそうにしている二人がただただ許せなくて、まるで八つ当たりの様になり、今に至る。

エリカは悩んだ。あんな姿を見られて、滅多にない口調で本気で怒られた。失望された。その相手が、再び意識した好きな人であれば猶更ダメージは大きい。

「エリカ、コーヒー飲む?」

「……飲む」

ある程度時間がたって、気持ちはいくらか落ち着いた。そう考えるとエリカからすれば恥ずかしさが勝る。勝るが、今まず彼女が行うべきだと判断したのは、彼に自分の気持ちを悟られない事だ。そう、告白するのはタイミングの良い瞬間、今年の優勝のタイミングにしよう。そう決断すれば気持ちも和らいだ。

「さつきは、ごめん。取り乱した」

「だね、らしくなかったよ」

「大会前でちよつと気持ちちが苛立ってた、ごめん」

「ま、愚痴ならいつでも聞くからさ。今はリラックスして、大会に挑もうよ。継続高校って相性悪いんでしょ? なら油断せず頑張らないと」

「ごめん、助かる」

今は、静かに待とう。落ち着けばいい、アドバンテージは自分にある、決心も強く本心から好きだといえる。なら、些細な事で心を揺さぶられて失望されない様にしなければならぬ。

一つ、女性として強くなったエリカの内心に気つく事はなく、しかし、クルトの中に確かに燃え始めたソレにもまた、彼はまだ気付かない。いや、気付かないフリをするだけに留めて置いた。

全国大会開始

パンター7輛、テイーガー2輛、テイーガーII1輛が一回戦の黒森峰の配分となった。開催場所は丘陵地帯で可もなく不可もなくといった具合。

クルトは現在、各校の関係者が立ち入り出来る専用モニターの前で、整備部の三名と共に座りながら試合が始まる瞬間を待っていた。一般観客席には多くの人が詰め込まれており、まるで人気野球チームやサッカーチームを応援するのと変わらない熱気が籠っている。

当然、黒森峰に対する応援も多いが、その一方で継続高校に対しての応援の声も多い。というのも、黒森峰の戦いは人によってはつまらない、と感じる事がある。その理由として、シンプルにして王道、統制の取れた編隊の元、目の前に立ちふさがる敵を策ごと撃滅するというスタイルであるが故に、奇策やどんでん返し、というのが基本的に無い。

その一方で、継続高校はまさに真逆。いかに相手の裏をかき、意表を突き、自らのペースに持ち込めるかという戦法の為、見ている側は、どういった動きをするのかと次の一手を期待させられるのである。

とはいえ、強豪校相手ではそれなりに激しい打ち合いをする事も多いので、揺らぎのない編隊行動に美を感じる者も多い。統一された射撃は圧巻の一言で、何より、国内でも有数の大口径主砲を持つ戦車を多く保有しているので、その圧力はまさに壮絶な物となる。

「さて、そろそろだな」

右に座るリツベントロップが、ノンアルコールビールを片手に始まる瞬間を待ち構えている。整備部が此処にいるのは、もし撃破された車両が居た場合は即座に、一人ひとりが点検を行って修理部位を判別し、校舎に持ち帰ったら即座に修復する為である。

「ミハエル、悪いけどなんか食い物買ってきてくれねえか？」

「良いですけど、何か希望は？」

取り敢えず適当でいい、という言葉を貰い、お金を手渡される。とはいえ、今から外の出店に買いに行くのも距離が掛かり、下手をすれ

ば試合が始まってしまいう可能性があった。

「ああ、買いに行くなら、後からサンダースの試合始まるから、向こうの学園の所行けば出店やってるはずだぜ。ついでに好きな物買ってきていいぞ」

「ああ、そういえば。分かりました、行ってきます」

受け取ったクルトは、ツナギを腰までファスナーを降ろし、上半身部分を脱いで熱を外へと逃がす。臍の下部で袖を結んで固定すれば、吹き抜ける風が涼しさを齎す。

サンダース高校の出店に入れるのは実を言えば戦車道関係者だ。だが、家族や生徒の友達であるならば例外として許可を与えられており、それ以外にも他校の生徒が観光気分を訪れる事も多い。それだけ人気がある秘訣は、訪れた瞬間の活気で即座に判断出来る。

大半は当然ながらサンダース高校の生徒だが、中には関係者である人物が話し込んでいるのも見える。アメリカ人の命でもあるハンバーガー、ピザ、ホットドッグ、マカロニチーズを基本に、ブリトー、フライドチキン、フレンチフライ、チリコンカン、パンケーキ、ドーナツ、パイ、アイスクリーム、クレープなど様々だ。

それだけではない、シャワールームが搭載された車から理髪店、マッサージ等、もはやリゾート施設と何ら変わらない様相となっている。初めて訪れた光景に流石にクルトも度肝を抜かれ、ただ茫然と立っていた時の事だ。

「Hey! Excuse me, Sir? You seem lost, May I help you?」

突然、背後から掛けられた英語に振り向けば、綺麗な、ウエーブがかかったブロンドヘアーの女子生徒が立っていた。青い瞳をキラキラと輝かせ、明るくて活発そうな人だというイメージをこれでもかと押し出している。

「Oh sorry, it's no problem. a...: I was overwhelmed with other people」

「Thanks bro! If you want, I can

just show you?」

少し考えているクルトに対し、目の前の金髪の生徒は突如として笑い出した。何事か、と茫然としていけば、その女子生徒はごめんなさい、と流暢な日本語を発していた。

「ごめんなさい、なんか普通に英語で会話してるせいで、此処日本なのに変だなあつて思っちゃった!」

「というか、日本語出来るんですね。サンダース高校ってアメリカから留学する生徒も居るので、普通に外国人だと思っちゃいましたよ……」

「ハーフだから半分当たりね! 私はケイって言うの、それで、君はどうする?」

どうする、というのは先ほどの会話の内容だろう。道案内というよりは、数多く店が並ぶ中で、オススメを紹介しようか、といった気軽な感じの当たりである。

「それじゃあ、お願いしようかな」

下手に色々見て悩むぐらいなら、慣れている生徒に聞いた方がはずれは少ないのは間違いない。

「OK! 因みに何をお探し?」

「あゝ、特には。なんか適当につまめる物って感じかなあ」

あの場の雰囲気を見て、まず感じたのは居酒屋も同然だ。ノンアルコールビールで誤魔化してはいるが、もしこの後に整備がないと分かっていたれば間違いなくアルコール入りのビールの飲んでいるのは確実と言えた。年齢を考え、そこまで脂っこくないものを、と考えたが、意外や意外、整備部の三名は本場ドイツの人間そのものなので、割と重いラインナップでも平気なのである。

「ふうーむ、結構ガッツリって感じ?」

「まあそうですね」

「それじゃあ、こっちなね!」

ケイの後に着いていけば、そこにあるのはド定番なホットドッグだ。とはいえメニューの内容は豊富で、王道のシンプルな物に加え、チリドッグ、シカゴ風、ロサンゼルス風、モンテリオール風、シアト

ル風、メンフィス風、アイダホ風、クリーブランド風と種類豊富である。

「……沢山あるんだね」

「もちろん！ シンプルイズベストには変わりないけど、たまには違うものも欲しくなるじゃない？ ここでのオススメはシカゴ風と南米系のチリドッグね！ シカゴ風は野菜たっぷりだし、チリドッグはチリミートがたっぷりでもう止まらなくなるわね！」

後はサイドメニューのコールスローとマカロニサラダ、定番中の定番のフレンチフライにオニオンフライと組み合わせは色々あるわよ！」

想定外の事態に、一件目で充分では、とクルトは思い始める。どうやらケイは顔なじみの様で、売店の車に乗る生徒はどれも美味しいよ！ と大声で勧めてくるので余計に悩むのだ。

「取り敢えず、頼む物は決めたから別のお店を紹介してもらってもいいかな？ 他の店で悩んでたら折角の料理も冷めちゃうし」

「成程！ それじゃあ次は、こつちね！」

次に歩いた先は、実に分かりやすくフライ系のお店だ。実に食欲をそそる匂いが空きつ腹を刺激する。

「まあ、見ての通りの店ね！ 私がオススメなのはこのホットチキンと、あえて和風の山椒クリスピーチキンね！」

「おお、これは美味そう」

次に、次に、と選んでいけば、大会開始十分前のアナウンスが響き渡る。もう少し回ったかった所だが、残念だが今回は先ほど選んだ二つの店で済ませる事にした。

「残念、時間があればもつと見て回ったかったんだけど」

「ありがと！ なら、次は学園艦にも遊びに来なさいよ、もーつと沢山の楽しいお店がいっぱいなんだから！」

「それはちよつと楽しみだな……よし、夏休みにでも遊びに行かせて貰いますよ」

「夏休み？ あれ、生徒だったの？」

「あ、そういえば自己紹介まだでした。黒森峰高校整備部、見入クルト

です」

「お、黒森峰ねえ。それで急いでたんだ、成程成程………はいこれ！」

ケイが紙に書いて、クルトへと手渡したのは携帯の電話番号とメールアドレス。あまりにもぎっくりとし過ぎて大丈夫なのかと不安になる。が。

「大丈夫！　こう見えても人を見る目は確かだから！　もし学園艦に来たなら案内するわよ！　その時はお礼にバーガー一個で良いわよ！」

「成程、成程。案内、ありがとうございます。また何処かで」

「もう、夏休みに会うんだから学園艦で、でいいじゃない！　湿っぽいわねー」

「すいません」

どうにも、ノリと勢いは強いが悪い女子生徒ではないのはクルトも既に理解していた。向こうも変に下心も無ければ疑う事もなく、竹を割った様な性格で人気者なのだろうと理解する。通りすがり、彼女へは男女関係なく挨拶が飛び交っていたのが証拠だ。

その場でケイと別れたクルトは、先ほどの売店で選んだ料理を頼み、ケイのよしみで揚げ物は出来立てを貰って袋を両手に持って戻る。

「おー、戻ったかクルト」

「いやあ、凄かったですねサンダースの売店。普通にレジヤ―施設と変わりないですよ」

「だろうな。あの場所は緊張感を抜くにはちょうどいい場所だから、お前さんも楽しんでいけ」

全員が座るテーブルの上に買ってきた物を載せていく。チリドッグとシカゴ風ドッグを二つ、ホットチキンと山椒のチキンがそれぞれ四つ、山盛りのフレンチフライ、コールスロー、サラダとまるで夕食の様なラインナップである。

「お、ステーキは流石に買ってこなかったか」

「まだ食べるんですかカリウスさん」

「勿論、日本人と違って俺たちの胃は頑丈だからな！」

大きく笑うカリウスに、リッベントロップとヴェンドルフが頷く。「まあ、試合見ながらつまむ量にはベストだな。マッシュポテトがあれば最高だったんだがな」

「あ、そういえばそれ買うの忘れてました、すいません」

「おいおい、頼むぜ？　なーんて、冗談だよ」

ヴェンドルフがノンアルコールビールを大きく飲み込みながら、右手にシカゴ風ドッグをもってかぶりつく。ししとうを焼いた物に、スライストマトと輪切りのピクルス、刻んだ玉ねぎがたっぷり乗って実にポリューミーだ。ソーセージが隠れんばかりのソレは、かぶりついた瞬間に野菜の旨味がじゅわりとあふれ出し、フレツシュなトマトとピクルスの酸味、玉ねぎの僅かな辛味に、ケチャップとマスタードが絡まり、肉厚なソーセージはしっかりと自己主張を忘れない。

一方のチリドッグは、挟んでいるパンがひたひたになるほどのチリミートがたっぷり乗っており、細かく刻んだハラペーニョと玉ねぎのアクセントは最高といえる。その辛さと刺激によって、思わずクルトの大好物でもあるスタウトを一気に飲み干してしまうほどだ。

「お、良い飲みっぷりだな。うん、このホットドッグ美味しいな」

「ああ、こっちのシカゴ風なんて野菜がこんだけあるのにソーセージまで美味しいと来た。アメリカのジャンクフードなんて言ってもらえな」

ヴェンドルフの想像では、アメリカのホットドッグに使われているソーセージは皮無しのあまり歯ごたえがない柔らかいタイプだと思っていた様だ。とはいえ、ケミカルカラーのドリンクやスナックやケーキがあるアメリカと言えど、そこに関しては譲れなかったのだろう。

「お前ら、食ってばかりじゃなくてモニターも見ろ」

一方のリッベントロップは溜息をつきながら、フレンチフライを齧りつつモニターを凝視していた。

『それでは第一回戦、黒森峰学園対継続高校の試合を開始します』

上空に放たれた開戦を告げる花火が小さく開くと同時、両陣営の戦

車が動き出す。まずは黒森峰、こちらのスタート地点は中央を森林で真横に区切られた丘陵からのスタートである。

選んだのは左側にある丘陵を超え、視界の悪い森林地帯を避ける事にした。いかに王道の戦いをするとはいえ、無駄な犠牲を出す必要など無い。抑えられる被害は抑えるのがベストであり、加えて自分たちが戦いやすい陣地を選ぶのもまた、戦上手の基本といえる。

一方の継続高校、使われている戦車は主にユーラシア北国と北欧の戦車が主流で、数は少なく最低数の5輜。BT-42が二輜、KV-1が1輜、III号突撃砲が1輜といったラインナップだが、注目を集めているのはなんといてもISU-152という戦車だ。主砲の口径が152mmと戦車の名を冠する物を持ち、戦車に搭載される主砲口径の中でも最大クラスと言えるだろう。

分類上は自走砲でもあるが、駆逐戦車としても分類され、天板がついているのでレギュレーションには違反していない。走破性も重量に対して申し分無く、唯一の懸念点は榴弾砲なので狙った位置に当たりにくいといった点だろう。とはいえ、その一撃はたとえパンターやティーガーであろうとも致命的であり、圧倒的な硬さを誇るティーガーIIやヤークトティーガーですらも大ダメージは免れない。

仮に撃破されなくとも、爆破のダメージで足回りがやられたりエンジンが破壊されて、結局は撃破判定にまで持ち込まれるので、それを仕込んでいるであろう森林地帯を避けるのは当然の判断とも言えた。

さて、一方の継続高校側。こちらはゲリラ戦を仕掛ける為に各車両が幅広い位置に散会。自分からの見通しは良く、相手からは悪いという場所をきっちり選んでいる。ここで動いたのは虎の子であろうISU-152だった。

「あのISU、動き面白いな」

「ほんとだ。エリカ達が西側通って森迂回してるのに、逆に森の中突っ走ってる」

「全体が見えてるから読める手段だが、面白いな」

「面白い、ですか？」

「ああ、奇抜な動きつてのは大した策は必要ない。単純に、相手の裏を掻くだけで成功なんだ」

「この場合、本来は正面から待ち構えている、もしくは奇襲する為に伏せているはずのISUを森に走らせて、丘陵を抜ける位置を狙撃するつもりだろうな」

「……見晴らし悪いですけど、そんなこと出来るんですか?」

リツベントロップがISUを動かした意図に気付き、カリウスがクルトの疑問に対して答えた。

「あの戦車、分類上はなんだったか分かるよな?」

「えと、自走砲ですよね? ……このルート、もしかしてあの主砲でやるんですか?」

「やるだろうなあ。んでもって、これは刺さるぞ。俺たちの学園は威力偵察に割ける戦車はパンターしかないからな。最初から森を捨てるならその位置に走らせたところで敵の位置が見えずに撃破されるだけだ。撃破報告である程度の場所を絞れるかもしれないが、不確定要素は戦況を曖昧にする。それで足並みが崩れるくらいなら、狙った陣地に到着した後の丘陵地帯の偵察つて所だろうな」

「じゃあ、継続側が森に隠れてたらどうしようもないんじゃないですか?」

「それもあり得んよ。戦車のタイプからしてⅢ号以外はどれも主砲口径はデカイ。デカイ分、森は逆に射撃の邪魔になるうえに障害物が多過ぎる。これで高機動戦車ならそれもアリだが、全体を通しても装甲でゴリ押し出来る。問題は全く動いてないフラッグのBT—42だ。何考えてんだ? ありや」

モニターで戦況を分析する一方で、黒森峰側は未だに動きのない相手に対して怯える、という事はなく、ただ粛々と戦車を前に進めるだけだった。

「隊長、森への偵察は出さないんですか?」

「エリカ、森は最初から戦場ではない。相手は確かにゲリラ戦得意としているが、そもその数が少ない。戦う場所を固定していれば包囲殲滅の的になるうえに、森も広いとは言えない。あれでは逆に居場

所を狭めるだけでなく、射撃の邪魔になる障害物のせいで首を絞めるだけだ」

「了解しました」

エリカとしては、現在地から東側に存在する森を警戒すべきだと声を上げた。しかしまほは、早々に見切りをつけるべきだと判断したのだ。

現在行われている試合は何百年、何千年前の戦とは違って定石や戦法は誰でも簡単に調べられる時代となっている。そうになると、王道パターンはむしろ自分の首を絞める事となってしまう。お互いがお互いの裏を掻き、一瞬の有効打を勝利の流れへと持っていく為にとるべき行動は、自分を疑わない事である。

裏目に出たらどうしよう、ではなく、そうなった場合はいかに冷静に対処出来るかだ。故にまほは疑わない。まっすぐ進み、敵が見えたら撃滅するのみ。背後からの奇襲など既に頭の中でパターンを構築している。故に、キューポラから顔を出しながらマップを見つめていた最中、微かだが確かに耳に響いた砲撃音と同時に号令を出す。

「全車、左に動け」

するりと、不自由なく全車がまほの号令に続く。発射音からのタイムラグと、砲撃したであろう戦車の主砲が着弾する時間を想定した結果の動きだ。右はちようど丘陵地帯へなだらかに続く道だが、左は逆に少しだけ切り立ったポイント。だが、迷いなくそちらに進んだ結果、飛来した砲弾は右側、そちらに回頭すると予想しての一撃だった。

もしこれで指揮系統に歪みがあり、回避運動で隊列が膨らんでいたら落伍車が出てもおかしくはない一撃。逆に言えば、相手の射撃制度の高さも馬鹿にならないという事だ。

「スポットしてないのに飛ばしたってことは予測撃ちか」

一連の動きを見ていたリツベントロップが呟いた。

「モニターだと継続はちようど反対側に位置取ってるから、そこから進行速度を逆算したのか。だとしても俺たちで調整した、期待スペック通り速度は出るパンターじゃなく、ティーガーに合わせた進軍速度を狙ってきたな。誰かは知らんがなかなかやる」

「よくわからないですけど、凄いですか？」

「着弾までの時間、移動ルート、地形この三つが合わさっても自走砲っていうのは本当の力を発揮しない。自走砲が本当に強いのは観測手があつてこそだ。それが居ない状態であれだけの至近弾を撃ち込めるんだ、相当な自信があるか、指揮を執ってる奴の頭がキレるかのどっちかだろうな」

「成程。お、継続側が動きましたね」

「ああ、これまたとんでもねえ事しやがる。正面衝突でもする気か」

次に動いた継続側の車両はあえて、黒森峰が進むであろう正規ルートへと集まり始める。ISUは森の側面で待機、そこからは残りのKV-1とⅢ号突撃砲とBT-42が雁行の陣形のように、斜めに配置された。そしてリツベントロップが吠いた理由の、残るフラッグ車が黒森峰陣営に突撃を始めたのだ。

「大和魂でも乗り移ったんですかね」

「流石にそれはねえだろ。真正面からぶつかって、掻きまわす方法でも思いついたんだろうよ」

味方であるはずの黒森峰側だが、継続高校の一手が気になって仕方がない。走る勢いを殺すことなく進んだBT-42はやがて、黒森峰の戦車を捉えた。それはつまり、エリカやまほ達もそれを視認したことになる。

「戦力差に絶望してヤケになったのかしら。まあいいわ、照準合わせ
て」

嘲笑う様に呟きながら、エリカは車内に指示を飛ばす。他の車両も主砲を一点に集中し、ただ呆気なく終わる。かに思われた。

まるで砲撃の瞬間を読んでいたかのように突如として蛇行を始めたBT-42の脇を砲弾が通り過ぎて行った。十輦中、全車の攻撃を回避したという事に会場からは驚愕の声が上がる。まるでスポーツカーの如く動き回るBT-42は既に間合いに入っていた。

「ちよつと！ 装填まだなの?!」

「まだ、かかり、ますよー!」

一方、距離を徐々に詰めてくるBT-42を見てエリカは焦りを浮かべた。それもそうだ、普通であればあの斉射によつて沈んでいるのが当然。だというのに、無駄な事だといわんばかりにすり抜けたBT-42は逆に攻撃のチャンスを得ている。フラッグ車であるまほのティーターの足を止められでもしたらその時点で終わりだ。故に、陣形が乱れ始めた。

「おーおー、マグロに追っかけられてる小魚みたいになってんぞ」「笑いごとじゃないですつて!」

BT-42は主砲をティーターへと向けていたが、間一髪で装填を終えたパンターの一撃に阻害されてルートを変える。だが、しっかりと別の車両に照準を合わせた砲塔は、戦車の命でもあるエンジンを、すれ違いざまに的確に打ち込んだ。小さな爆発と共に起こる火災、先に白旗が上がったのは、黒森峰側のパンターであった。

「あー!!! エンジン!! 整備大変なんだぞ!!!」
「落ち着け落ち着け」

一方で、明らかに被害箇所が見えた瞬間、クルトは椅子から立ち上がって声を上げた。エンジンは戦車の心臓。そんな場所に砲弾を撃ち込まれては堪ったものではない。この後の整備を考えて暗くなるクルトだが、それで終わらない。

糸の合間を縫うようにして動き回るBT-42は確実に、焦らずしっかりと一輛ずつを喰らっていく。それに追従する形で森林部分からの支援砲撃。ISUの一撃を側面に喰らったパンターは、下手すれば死ぬのではないかと言わんばかりの衝撃と爆炎が包み、二転三転と転がってから白旗が上がる。

間違いなく流れは継続高校にある。王者黒森峰のこの状況に会場は熱気に包まれた。一方で空気が死んでいるのはクルトである。

「なんだ、ギャンブルで全額飲まれたみてえな顔になってんぞ」「ほっとけカリウス、後で嫌でも現実を見るハメになる」

クルトの絶望はさておいて、黒森峰側も負けていない。

「全車、まずは落ち着け。パンターは二輛で敵のフラッグ車を追走、撃

たせる暇を与えるな。残りは森林地帯の敵車両に集中、エリカ、敵のISUはお前に任せる」

「了解！」

敵は上手く黒森峰の弱点を突いた。それは、黒森峰は完全なトップダウン制になっている指揮系統であるが故に、突発的な事態に個人が対処し辛く混乱するという点だ。そして指示待ちをしている間に敵に撃破される、というのが今回の出来事。

仮に個々を重んじているのであれば、こういった事態に対してもまた柔軟性をもつて対処出来ただろう。それができないのは、黒森峰では個人プレーを考えていないからである。多少なりとも個性はあるが、一つの枠組みに嵌められた時点で潰えてしまう。加えて、学園艦の風潮でもある質実剛健を重んじる生徒が多いからこそ、上の命令に縛られるという弱点があった。

だが、そういった事態を想定出来るにも関わらずなぜ常に何故トツプダウンか、それは隊長に任命された者のカリスマと確かな腕を信頼することによる編隊行動を重視しているからだ。一瞬の迷いも一つの号令で引き締まる。それこそが逆に、黒森峰最大の強み。

「砲撃させない、近づかせない」という命令に純粹に従う為、砲撃ではなく運転に集中したパンターはしつかりと先ほどのBT-42を追いついて追い出した。そうになると、露出した残りの戦車に火力が一斉に集中する。

まずは足の遅いKV-1とISUに砲撃が集中する事で一瞬で撃破。平べったい形で隠蔽する為の迷彩を施しているIII号突撃砲もまほのティーガーに撃破され、フラッグ車ではないBT-42も落とされた。

そうなれば残るのは最後のフラッグ車のみ、まるで殲滅戦の様になってしまったが、手間の掛かる相手にはそれ相応の対処をすればいいだけ、と言わんばかりに、ただ涼し気にまほは指示を続ける。

「砲撃にタイムラグを作れ、同時間隔に撃つてはまた回避されるだけだ。パンターは1号車、3号車、4号車は足回りを重点的に狙って潰せ。残りの車両でティーガーIIの射線に誘導しろ。」

エリカ、この中で砲弾の速度が一番早いのはティガーIIだ、相手は癖のある動きだが、やれるな？」

「勿論です」

隊長に信頼されている、ただそれだけで力が湧いてくる。味方の砲撃と敵の動きをしっかりと把握しつつ、その瞬間を逃さない。

森に逃げ込もうとした所に釘を刺され、相手の車両が縦に見えた瞬間、トリガーを引いた。まっすぐに素早く飛んだ砲弾は車体後方に突き刺さり、白い旗が上がった事で一回戦の勝利は黒森峰の物となる。

「……………主砲、曲がってる。エンジン、吹っ飛んでる。装甲板、めくれている。うへ、うへへへへ、うへへへへへへ」

一方、この後の忙しさを想像して絶望している者がいるなど、その場に居合わせた者以外は誰も知る由もなかったのであった。